
あの空を夢色に

クロマティ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あの空を夢色に

【Nコード】

N7058W

【作者名】

クロマティ

【あらすじ】

廃校問題解決から一週間が経った。みんなそれぞれの道に向かって歩き始めている最中にまたしても新たな問題が…

原作、恋色空模様の主人公、伊藤誠吾に代わって新たな転校生、山宮省吾^{みやしょうご}を主人公に新たなストーリーが幕を開ける。

彼女たちとの新たな出会い、神那島の空が恋色に染まる！

プロローグ

人物紹介

山宮省吾 17歳 高校2年生

今作の主人公。親が事故で他界し、身寄りのない省吾に神那島にいる親の親戚にあたる人の誘いで東京から神那島に一つ下の妹と共にやってきた。もともと親が家にいなかったらしく、家事全般は誠吾以上の腕前を持つ。運動もできて、剣術を習っていたので刀が使える。父の片見の逆刃刀を持っている。頭も良くて正直非の打ちどころがない。唯一のコンプレックスは自毛が銀髪なこと。

やまみやみずき
山宮瑞希 16歳 高校1年生

省吾の真正正銘の妹。正直いってドジっ子、家事とかやらせると倍くらい仕事が増えるくらいの不器用さ、しかしスタイルも良く、顔も可愛いのもてるのだが、彼女は男性恐怖症なので、近づくと殴られる。ちなみに省吾と誠吾は昔から知っているので、大丈夫らしい。

「準備できたか？」

「うん、大丈夫だよ」

「よし、んじゃあ三島さん待たせると悪いし行きますか」

三島さんとは、俺たちの親戚で、親代わりに立候補してくれた人だ。今日から三島さんが住んでいる神那島に行くことになった。神那島は最近のニューースで神那学園というところが廃校になるらしいから…もしかすると学校は無理かもな。

俺たちは部屋を出て、エレベーターに乗り込んだ。

「ねえねえ、お兄ちゃん」

「ん？何だ瑞希？」

「神那島ってどんなところなんだろう？それが楽しみなんだ」

「まあ少なくとも東京よりは空気もいいし、自然がいっぱいあるところなんだろうな」

唯一の心配は不便利さがなければいいが…まあ贅沢は言ってもらえないか。

そしてエレベーターは一階につき、降りたその先に人影と一台の車があった。おそらく三島さんだろう。

俺たちはすぐに近くに行つて挨拶をした。

「おはようございます三島さん、今日からよろしくお願いします」

「よろしくお願いします」

「あいよ、よろしくね二人とも、あと堅つ苦しすぎじゃないか？これから私のことは、母さんと呼んでいいんだからね」

「じゃああらためてよろしくね母さん」

「よろしく、母さん」

「ん〜、なんて良い響きなんだろう〜、よし、じゃあ乗った乗った」

俺たちはケートラの荷台に荷物を乗せた。

「というわけで、省ちゃんは荷台に乗るときな。瑞希ちゃんは助席に座るといい」

「荷台に乗るのはいいとして、何故に省ちゃん？気恥ずかしんだけど」

「駄目かい？結構気に入ったんだがね」

と言って、小さく微笑んだ。

「いいよ、何か言っても無駄そうだし」

だって、あんなマイペースな人に突っ込むほうが時間の無駄だよ。

「お兄ちゃん？荷台でいいの？」

「瑞希はそんな心配しなくていいから。安心して中に居ていいぞ」

瑞希は、親が亡くなってから少し心配性になっている。まあしょうがないことだが…

「乗ったかい？それじゃあ出発するよ」

その声と共に、車は急発進した。

「あだっ！」

体制が不安定だった俺は見事に荷台でこけてしまった。

「あら、ごめんね」

「ちょ、出発するなら何か言っつてよ！」

「お兄ちゃん、大丈夫？」

瑞希が心配そうに、窓から顔を出した。

「ああ、心配すんな、ちょっとこけただけだから、それより顔出してるって危ないぞ」

「はい」

それだけ言っつと顔を引っ込めた。

そして車に揺られること数十分、ちなみにこの間に警察に見つかからないように、仰向けになっつてずっつと空を見ていた。

「省ちゃん、もう神那島大橋に入ったから顔出してもいいよ」

そう言われたので俺は起き上った。すると左右にきれいな海の景色が広がっていた。

「わあ！お兄ちゃんすごいねー！」

「たしかにこれはすごいな」

「ところで二人はもちろん学校に行くんだよね？」

「あれ？たしか神那学院って廃校になるんじゃないかなかった？老朽化か何とかで」

「まだそつちには情報が来てないみたいだね、つい最近に老朽化で廃校になることがなくなったらしいのよ」

「なんで突然、何かあったの？」

「神那学院の生徒さんの一部が反対運動を起こしてね、その子たちが老朽化では廃校にできない理由を証明してね、たしか伊藤博士の息子さんがこの反対運動のトップだったような…」

伊藤博士？…まさか！

「伊藤博士の息子って、伊藤誠吾って名前じゃなかったっけ？」

「そついえば！てことは…誠吾さんってここに転校してたんだ」

「なんだい？伊藤博士の息子さんと知り合いなのかい？」

「知り合いも何も誠吾は俺の元いた学校のクラスメイトで親友なんだよ！」

「あらま、そんな偶然もあるんだねえ」

誠吾にまた会えるんだ！

「おっと、そうこうしているうちに橋の終わりが見えてきたよ」

そして俺たちを乗せた車は橋を渡りきった。

そこから数分した商店街の近くに三島宅、俺たちが住むことになる家が見えた。

「さあ、着いたよ！荷物をおろして玄関に置いときな、お父さん呼んできたら部屋に案内するから」

そういつて家の中に入って行ってしまった。

しかし時刻はまだ朝の7時なので少々眠い。それなのにもっと早起きな母さんはなんであんなに元気なんだ？島民恐るべし。

「とりあえず荷物玄関に置こっ！」

「ああ、そうだな」

俺たちは玄関に入ってすぐ家の床に荷物を置いた。

すると母さんが戻ってきた。

「ごめんね、お父さん今ちよつと散歩に行ってるみたいでね…荷物
はあとでもいいから先に学校に行って編入手続きしてきなさい。つ
いでに神那島の街も見てください」

そういつて俺に地図と、二人に1万円ずつお小遣いをくれた。

お金はあるからと断ったが、いいからのごり押しで仕方なく受け取
った。

そして俺は許可を取るために逆刃刀も持って行った。

「それにしても空気がものすごいおいしいね」

「確かにな、夏なのに心地よい浜風だ、来てよかったな」

「うん！」

満面の笑みで瑞希はそういった。

そして地図を見ながら歩くこと数分、俺たちは神那学院の校門まで
来ていた。しかし何故か騒がしい。

「まったく、生徒会役員ともあろうものが不要物を持ち込みおつて」

「デ、デジカメは私にとっては必要なんです！」

見た感じ、持ち物検査かなんかやっているのだろう。

「どうせ私的に、だろ？それが駄目だと言っているんだ！」

「でも…私は不正なことには使いませんから…お願いします」

「駄目というものは駄目だ、さあさっさと行け。これは没収だ」

「で、でも…」

「うるさい！風紀委員に口答えする気が！しよっ引くぞ！」

省吾「それはまたずいぶんとお偉いさまなんだな、風紀委員様は」

気づいたら俺は風紀委員につっ搔かっていた。

「何だお前は？」

「明日からこの学院に転校してくる者です」

「そんな奴がいちいち邪魔するな、さっさと行け」

「いやあ、しかしここの風紀委員はこんくらいのも物でも没収するとはね、しかも理由も聞かずにねえ、実にお堅いですね」

「何がいたい…」

「あんたみたいなのがいる風紀委員会はたかが知れてるってことだよ」

「なっ、貴様！」

「怒るのは勝手だが、まずそのデジカメから返してもらっぞ」

「ふん、盗れるものなら…ってあれ？」

省吾「これ持ってさっさと行きな、巻き込まれる前に」

「あ、ありがとうございます、あの…あなたは？」

「今は説明してる時間無いから、瑞希！よろしくな」

「はい、ほどほどにね」

「くっ！貴様！しょっ引いてやる！」

「何逆切れしてんの？片腹痛いし」

「許さん！捕まえてやる！」

「できるもんならやってみな！」

俺は山のほうに逃げた。

それについてくるように風紀の奴も来た。しかも携帯で話してるってことは…

「増援か、おもしろい！」

俺は山道を8割くらいで走っていた。しかし風紀委員との差は開くばかりだった。

「くっ、ま、まてえい！」

「あれ？やっぱ風紀委員で口だけ達者な集団なんですか？」

少し止まって小馬鹿にしたように笑った。

「ふっ！バカはお前だ！」

すると止まっていた周りから刺叉を持った風紀委員が出てきた。

「ははは！バカめ、風紀委員を敵にするからいけないんだ、さあ！
やっちまえ！」

さっきの風紀委員の合図で刺叉が構えられる。

「しょうがないな、この手は使いたくなかったが…」

そう言っただがんで逆刃刀を抜刀し、四方八方に斬りつけた。

すると、刺叉は全て真っ二つになり、使い物にならなくなった。

それと同時に風紀委員の隙間をかくぐってまた走り出した。

「あっ、待て！」

「待ちなさい！あなたたちで敵うような敵じゃないわよ」

「さっすが誠吾の親友！本当に面白いわ！」

「み、三木さんに篠原！」

「あとは私たちにまかせて行きなさい、生徒たちが今がチャンスと校門をどんどん抜けて行ってるわよ」

「な、くっ分かりました。あとはお任せします」

.....

「ふう、ここまででは追っかけてこないだろ」

てかここどこだ？完全に道に迷ってしまった。とりあえず適当に降りて行ってみるか。

すると草むらの方から人が出てきた。

「見つけたわよ！山宮省吾！」

「ちっ、また風紀委員かよ、てかなんで俺の名前知ってたんだ？」

しょうがない、また逃げるか。

そう思って振り返るが、

「残念でした。こっちもいまーす」

しまった。挟まれてしまった。

「まあそう逃げなさんな、あなたが誠吾の親友だつてことは分かっているし、あなたの妹さんからも事情は聞いたわ、ごめんなさいね、物分かりの悪い連中で」

「風紀委員にも話のわかる奴がいるもんなんだな」

「私たちは別の理由で捕まえに来たんですよ！」

「どういう了見だ？」

「見りゃわかるでしょ！あなたの刀よ刀！」

「どうやらこの人達は俺の刀のことで捕まえに来たらしい。」

「でも俺、学院生じゃないし」

「自ら転校生と名乗ったくせに何を言うか！」

「あっ、そっか。」

「まあでもただ捕まえるだけじゃ面白くないから条件を出すわ」

「条件？」

「ちよつと！篠原さん！？」

篠原と呼ばれる彼女を止めようとするが、

「私たちと戦って勝ったら無罪放免、負けたらそのまま連行っついでうのはどう？」

「おっ、面白そうじゃないか、いいぜ」

「篠原さん！まったくもう…仕方がありません」

諦めたのか、彼女は刺叉を構えた。

「そこなくちゃ、まっちゃん！」

篠原はトンファーをすでに構えていた。

「言っときますが、俺は相手が女子だろうと敵なら容赦はしない！」

そういつて俺は動き出した。

「き、消えた!?!」

「まっちゃん!下!」

「えっ!?!」

「はっ!」

俺はまっちゃん?と呼ばれる彼女の刺叉を真っ二つにした。

その後すぐに足払いをする。

「きゃ!」

そして剣先を彼女に向けた。

「くっ!」

「まず一人」

「なめんじゃないわよ!」

すかさず聖良がトンファーで攻撃するが、この攻撃は空を切った。

「くっ、どこに!」

すると聖良の背中に再び剣先が当たる。

「チェックメイト、ですね」

するとその子は武器を落として地面に座った。

「だあー! もう! なんで誠吾の親友なのにこころも秀でてるのよ!」

悔しそうに地面を叩く彼女、

「とりあえずこれで見逃してもらえますよね?」

「な、そんなこと私は…むぐっ!」

「もちろんよ、負けは負けだもん。でもあなた誠吾の友達なんですよ? だったら私たちが案内するから付いてきなさいよ」

「でもついて行って実は罠でした、とかいう展開は期待しませんよ?」

「しないわよ! 第一そうしてもあなたなら逃げるこころくらい簡単でしょ?」

「まあそうですけど…分かりました。どうせ俺も道に迷って困って

ましたし」

「むーむー!!!ぷはっ!苦しいじゃない!篠原さん!」

「あ、ごめんまっちゃん」

今まで口を押さえられていたので悶絶していたまっちゃんさん

「ていうか私はあなたを見逃すなんて認めていないのよ!!」

どうやらまだ俺を捕まえる気でいるらしい。少し恐怖心を与えておくか。

俺はまっちゃんさんの懐に素早く入り込み、逆刃刀の刃を返して首に近付けた。

「少し黙っていただけですか?次なんかしようとしたらその顔に傷入れますよ...」

三木「ひっ!?!」

それだけ言うとまっちゃんは腰を抜かして倒れた。

「ちょ、省吾君!それはさすがにやりすぎよ!」

「言ったでしょ?俺は相手が女の子だろうと容赦しないって」

「そうだけど...」

「しかし、俺もさすがに今のはやりすぎました。頭に血が上るとこ」

うつつ風になるのは分かっているんですが…」

「…」

まあ今ので多少の恐怖心を叩き込めたからいいか。

「それでは案内の方をお願いしますね、…えつと」

「聖良、私のことはそう呼んで構わないわ、省吾君」

「どうも、俺も省吾でいいから」

「ならそう呼ばせてもらおうわ」

「そっちは確か…まっちゃんさんでしたっけ？」

「そ、そんな呼び方しないで！三木でいいから！」

まだ多少恐怖心があるのか、言葉に力がない。

「了解、三木さん」

自己紹介も済んだので、俺は聖良たちの案内で学院に戻ってきた。

「あ、お兄ちゃん！お帰り！」

「おう、いろいろと悪かったな」

「しかし、篠原さんたちとあんな感じで来たってことは別に捕まっただけじゃないんだな」

「しかしなかなかいい奴だな！さすが誠吾の親友だ！」

声のする方向をみるとかなりずたぼろな男二人がいた。

「あいつら瑞希ちゃんに詰め寄るもんだから…」

「なるほどな、って誠吾！久しぶりじゃないか！連絡もせず転校していくから心配したんだぞ！」

「悪かったな省吾、親父殿の都合で連絡する暇なかったんだよ、こっちに来てからもバタバタでさ」

「あなたが省吾さんですか…なるほど」

「あれ？美琴ちゃんじゃないか、ずいぶんと大きくなったな」

「えっ？私はあなたと会ったの初めてなんですけど…」

「まあ、ずいぶん小さいころに遊んだだけだからね、でも瑞希は覚えてるんだろ？」

「瑞希はなんとなくですが…小さいころによく遊んだ記憶があります」

「あの…さっきは本当にありがとうございました」

美琴ちゃんの横に居たのは、さっきデジカメを盗られていた子だった。

「いいよ、気にしなくても」

「でもすごいね、風紀委員だけじゃなく、あの三木さんや聖良ちゃんまで倒しちゃうなんて」

今度は誠吾の後ろにいた、というか抱きついてた女の子が話した。

「ちょ、彩！いい加減離れろ！」

「いいじゃんか〜もつすこ…！キャイン！」

横からもすごいプレッシャーを感じると思ったら聖良だった。

「あやっぺ？人様の彼氏に抱きつくなんて、なかなかいい度胸してるじゃない！」

「く〜ん、く〜ん」

誠吾にひっついてた子はプレッシャーに負けて誠吾の後ろに隠れていた。

「それより誠吾、みんなの紹介をしてくれないか？名前が分からないから突っ込みようがない」

「おお、そうだな、じゃあとりあえず男の方から、右に居るのが阿部久志でその隣が藤堂春樹だ」

「どうも省吾、この学院の生徒会長をやっているからよろしくな」

生徒会長！？この雰囲気でか？

「い、今ものすごい失礼なことを考えてなかったか？」

「いや、何でもないから忘れてくれ」

「省吾！俺が藤堂春樹だ。よろしくな」

「ちなみに春樹は見た目通りの筋肉バカだから」

「その補足いらねえよ！」

「よろしく、春樹に久志」

「おう！」

「ああ！」

「じゃあ次に女子の方を、手前が俺の妹の伊藤美琴で、その横が美琴の友達で中西藍子ちゃん」

「よろしくです、省吾さん」

「よろしくお願いします、省吾さん」

「よろしくね、美琴ちゃんに藍子ちゃん」

「次に彩と、って佳代子？」

気づいたら佳代子は省吾の前に居た。

「ん？」

「…ひとつ手合わせ願いたい」

そう言うと佳代子は真剣を取り出した。

「へえ、刀使えるんだ。いいぜ」

「ちょ、佳代子に省吾！」

「誠吾、離れてろ」

俺は抜刀の構えをした。すると相手も同じ抜刀の構えだった。

「…行くぞ」

佳代子の声と共に二人は誠吾達の視界から一瞬消えた。

ガキンっ！

ちっ、思った通りの使い手だな。さっきの二人の比じゃないぞ。

俺は再び刀を鞘にしまう。そしてまた抜刀する。

「はあ！」

「くっ！」

ガキンっ！

またしてもぶつかり合うだけ、しかし今度は納刀をしなかった。

(俺とおんなじ考えとは、面白い！)

ヒュン！

お互いの刀が首の手前で止まっていた。

「いや、凄かった、佳代子さん強いね」

「ふっ、それはお前も同じことだ」

俺たちは刀をしまつて軽くお辞儀した。

「悪いな誠吾…てどうした？」

俺ら以外のみんなが固まっていた。

「まさか佳代子と対等に渡り合える相手がいたなんて…そりゃ勝てないわ」

「すごいよ！なんか映画見てる気分だったよ！」

「省吾！ぜひとも俺を弟子にしてくれ！！！」

「とてもお兄の友人とは思えない…」

「…」

藍子ちゃんまだ固まってるし。

「すまなかつたな。刀が使える相手と戦うのは久しぶりだったから」

「気にすんな、俺も楽しかったし」

「しかしとてもいい太刀筋をしていた。何か剣術をやっていたのか？」

「道場で剣術をやってたんだよ。それに趣味が居合いだっただし、小さい頃から刀を扱ってきたからな」

「ふむ、そうか、これからも偶に相手を頼んでもいいか？」

「もちろん。こちらこそよろしく」

俺達はがっちり握手をした。

「誠吾とは全く違うタイプね、面白いわ！」

「あ、あの……」

「確かに運動音痴なせいちゃんとは大違いだね」

「み、みなさん……」

「う、うるさいよ……」

「じ、時間が……」

「これで頭がダメなら仲間だな！」

「春樹がどうだかは知らないけど…まあ誠吾よりは悪いよ」

キンコーンカーンコーン、

「「「「「あつー！」「」「」「」

鐘の音と共にみんなが止まる

「うっ、遅かった…」

「瑞希、分かってたなら言わなきゃ！」

「どう考えても省吾さんたちのせいですよ、瑞希は何回も言おうとしてたのに聞かないから」

「そんなことより早く行かんかい！予鈴なっとんじゃ！」

「ひい！金髪の悪魔が怒った！」

「こら！人様の彼女に悪魔とかいうな！」

「のろけとる場合かい！急ぐよせいちゃん！」

金髪の悪魔、もとい聖良の一声でみんなが校舎に入っていった。

「うっ、ごめんさーい…」

「あつ、瑞希悪い！瑞希が悪い訳じゃないのに…ごめん」

「全く、自分が悪いのに妹に当たるなんて…なかなかの卑怯者じゃない」

聖良の言葉が胸にグサツと刺さる

「瑞希、本当にごめんな」

「うん、いいよお兄ちゃん」

半泣き＋上目遣いでこっちを見る瑞希

「うっ」

さ、さすが我が妹よ。その目は人を駄目にする目だ…

「か、かわいい！省吾！お持ち帰りしていい！？」

「なんで聖良が過剰反応を示すんだ！」

「だって！かわいいんですもの！」

「そうだとしても我が妹をお持ち帰りなど断じて許さん！」

「…省吾ってシスコン？」

「ぐはっ、そ、それを言うな…」

まあ、今の発言は露骨に僕はシスコンですと言っているもんだが、

「まあいいわ、とりあえず職員室まで案内するから」

「…よろしく頼む」

「へえ、シスコンを否定しないんだ」

「うっ、聖良、それ以上言っな…」

俺はマジで刀を抜こうとした。

「お兄ちゃん！ストップストップ！」

そして必死に止めようとする瑞希。

「…悪い、また暴走するところだった」

「それよりシスコンって何？」

「ぶっ！」

「ふふん、瑞希ちゃん、シスコンっていうのはね…」

「聖良やめろ！妹に変なこと教えるな！」

「はいはい、まあ今日は時間がないからまたいずれしてあげるわね
瑞希」

「えー、気になります！」

「瑞希、その話は終わり！ほら聖良も！早く行くよ！」

俺は強引に話を逸らして校舎に歩みを進めた。

「えっと、君が山宮省吾君で、隣が妹の瑞希君、と」

俺たちは聖良の案内で職員室に来ていた。今話しているのは風紀委員会顧問の教頭先生。この人に了解をもらって次は校長先生の元に行く。

「はい、いいですよ。次は校長先生に判子を貰ってきてください。それと聖良君はもう教室に戻っていいですよ」

「分かりました。じゃあまたね二人とも」

「ああ、ありがとうな」

「ありがとうございました」

それだけ言つと聖良は職員室を出た。そして俺たちも職員室を出て、すぐ隣の校長室に来た。

「失礼します」

俺はノックをして校長室に入った。

「君たちだね。話は聞いているよ。では書類をこっちに持ってきてくれ」

俺は瑞希の分も合わせて校長先生に渡した。校長先生は慣れた手つきで書類に判子を押ししていく。

「はい、じゃあこれで編入手続き済んだから、明日は編入試験だから今日は帰りましたまえ」

「はい、分かりました。あ、あとこれの許可書が欲しいんですけど…」

そう言っつて俺は刀を取り出す。

「な、何故そんなものを持ち歩いとるんだね！」

「父さんの形見なんです。特に悪さに使うというわけではないので許可書を出してもらえませんか？」

「うーん…まあ風紀委員もこういうものは持ち歩いておつたし、まあいいだろう。ただし持ち歩くだけだからな。学院内では絶対使用しないように、分かったかね？」

「はい、分かりました」

「まあ許可書も明日の試験しだい渡すかを決めるよ。とりあえず今日は帰りましたまえ」

「はい、では失礼します」

俺たちは校長室を出た。

「ふう、じゃあとりあえず帰るか」

「そうだね。お父さんにも挨拶しなくちゃいけないからね」

そうして俺たちは神那学院を後にし、ひとまず家に帰った。

.....

「もう少しで家に着くな」

「うん、それにしてもみんな優しくそうな人ばかりだったね…男の人以外」

「こらこら、露骨に嫌がるんじゃない。これから仲良くしていくメ
ンツなんだから」

「でも、誠吾さんはともかくあの二人は慣れてないよ！」

「慣れるためにも積極的に関わっていくんだな。大丈夫だ、あの二人はそんなに悪い奴に見えない」

「悪くなくても変態さんだから駄目なの！びっくりしてけっっちゃつたら「もつとして！！」とか言うんだよ！」

久志か春樹かはわからんがそいつは危ないな。

「確か眼鏡の人だった」

久志！今ので真面目なイメージが消えてしまったぞ！

そんなこんなで話していると家の近くまで来たのだが…何やら騒がしい。

「そんなもんわしは知らん！よそ者なんぞを家に泊めれるか！まっ

たく、相談もなしに勝手に決めおって」

「どうしてそんなこと言うのよ！そんなによそ者が嫌いなの！？」

「ああ、嫌いじゃ！前回の件以来よそ者なんぞ信じれなくなったわ
！」

「誠吾君はこの島を救ってくれた子なのよ！どうしてそんなに悪く
言うの！内海様の言葉を忘れたの！？」

「どうやら俺たちのことであーだこーだ言っているようだ。

「あ…：…どうかなさいましたか？」

「おいお前たち！さっさとこの島から出ていけ！よそ者にこの島は
渡さんぞ！」

「だからなんでそんなことを言うのよ！この子たちは悪くないでし
よ！」

「そんなこと関係ない！きつと甘えるだけ甘えたらこの家をどこか
に売り払うつもりなんじゃろ！そうはいくか！この家はわしが守る」

聞いた感じだとこの人、人間不信にもなっているのか？

「いい加減にしなさいよ！」

「やっぱり私たちはどこへ行っても邪魔なのかな…」

「瑞希、そういうことは言うな。少なくとも母さんはそうは言って

なかつただろ？」

瑞希はこういうことになるとすぐに弱気になってしまう。まあ今までが今までだからな。仕方がない、ここも諦めなきゃいけないのか。そう思うと俺は口を開く。

「母さん、もういいよ。俺たちは出て行くから」

「な、何言ってるんだい！」

「そう思っている人と一緒にいても母さんたちに気を使わせちゃうからね、瑞希もそれでいいか？」

俺がそういうと瑞希は頷いた。

「というわけですから。短い間でしたがありがとうございます」

俺たちはまだ持っていてなかつた荷物を持ってここを離れた。

「もう二度と顔を見せるな！よそ者が！」

最後に言われた一言が胸に深く突き刺さった。

俺たちはとりあえず神那島大橋まで向かった。

「よそ者が…少しは変わったかと思ったが、そんなことはなかつたみたいだな」

俺たちは今薄暗い道を歩いている。神那島大橋に向かう途中なのだ

が結構遠かった + 荷物が重いせいであまり早く歩けなかった。

「ぐすつ」

瑞希はまだ少し涙目だった。昔のことを思い出したのだろう。

俺たちは十二年前くらいに神那島に住んでいたことがあった。父の単身赴任で俺たちもついて行くことになったが、その時もあまり歓迎されなかった。

そういえばあの時確か一人歓迎してくれた女の子がいたような…気のせいかな。

「今日はさすがに暗いから本土に行くなら明日だな…瑞希、野宿になるがいいか？」

瑞希は少し反応がなかったが、顔を縦に振った。

すると、

「ん？省吾か、何してるんだこんなところで？」

制服姿で買い物袋を持っている誠吾と、その横に聖良がいた。

「誠吾か、いや、ちょっといろいろあってな、今野宿する場所探してるんだ」

「野宿？確かお前って保護者代わりがいたんじゃない…」

「追い出されたよ、よそ者がってね」

「まだこの島にそんなこと言っちゃつがいたとは、って瑞希ちゃんも？」

「はい」

「ちょっと省吾！何考えてんのよ！あんたはともかく瑞希ちゃんにまで野宿させる気！？」

「俺はともかくって、ちゃんと瑞希には承諾を得たが…」

「そついう問題じゃないでしょ！女の子なのよ！？」

「聖良さん、いいんです。慣れてますから」

「は？慣れてるって？」

「まあその辺は後で話すとして、いいから家に来いよ」

「いやいや、そんなの悪いよ、でも出来れば瑞希だけは泊めてやってくれないか？」

「いいから、とりあえず家に来て、いいよな聖良？」

「もともと誠悟の家なんだから私に聞かなくてもいいわよ、まあ今日はできなくなっちゃうけど」

「？何が出来なくなるんだ？」

「聖良！？何いってんだ！」

「あら〜でも今日はしたかったんじゃないの？せっかくみこっちゃんにも了解とったのに…」

「み、美琴に話したのか！？そういえば今日確かメールが来て、藍ちゃんの家泊まるって…そういうことか!？」

これは…また随分とお盛んなようで…

「瑞希、やっぱり野宿にしよう」

「う、うん。そうだね…」

「ちよ、待って!？誤解だから、話を聞いてくれー!！」

なんか色々あったけど、結局俺達は誠悟の家に泊めて貰うことにした。

てか誠悟って聖良の尻に敷かれてるんだな…

プロローグ（後書き）

えっと、一応ある程度のキャラ紹介は終わりました。

静奈さんと清美さんは次回に登場予定です。

では次回。

昔の話（前書き）

誠吾の漢字が間違っていました。正しくは誠悟です。

申し訳ありませんでした。

ではこれからもよろしくお願いします。

昔の話

「お邪魔します」

「お邪魔します」

「どうぞどうぞ、あがってくださいな」

「なんで聖良がいつてんだよ、俺んちなんだけど」

「いいじゃない、いずれ私の家にもなるんだし」

今凄いことをサラッと言ったな。何というか聖良って押しが強いと
いうか、強情というか…

俺達は誠悟の家の居間まで来た。

「しかしあいかかわらず綺麗好きだな、誠悟は」

「省吾も人のこと言えた義理か？綺麗好きなのはお互い様だろ」

「確かにな」

俺たちは少し笑った。

「何というか、主夫の会話ね」

「そ、そうですね。あははは…」

「誠悟、久しぶりに俺の料理を振る舞ってもいいか、というか振る舞わせてくれ」

「えっ、まさか…あれらを作るのか？」

「ああ、材料なら誠吾の買って来た物があれば十分だ。調味料は俺が持っている」

俺は鞆から少し大きめな箱を出した。

「分かったよ、んじゃよろしくな」

「ああ、まかせとけ」

俺は台所の場所を聞いてそこに向かった。

視点が誠悟に切り替わります。

俺が場所を教えた後、すぐに省吾は調理にかかった。

しかしあれか…聖良は驚くだろうな。

俺が台所に戻ると聖良がすぐに聞いてきた。

「ねえ、任せて大丈夫なの？」

「心配するな。何ていったって省吾は俺に料理を覚えてくれた人だからな」

「ええ！？誠悟に！？てことは腕前は誠悟以上ってこと？」

「いや、全般で言えば俺の方が自信はあるんだが…」

「焦らしてないで話さないよ」

「あいつの中華料理の腕前だけは正直東京の超有名中華料理店の一番腕の立つ奴でも勝てないだろうな」

「うそっ！？そんなに!?!」

「あいつが台所に行く前に取り出した箱があっただろう？あれは中華料理で使う調味料の全部が入っている。だから食材さえ手に入ればどんな中華料理でも作ってしまうくらいの腕前だよ。もっとも、食べてみたらその凄さが分かるがな」

「じくりっ」

するど、

「瑞希！すまないができた料理をどんどん運んで行ってくれないか？」

「はあい！今行く！」

省吾の声を聞いて瑞希ちゃんはすぐさま走って行った。

視点が省吾に戻ります。

「おまたせ、さあ！どんどん食べてくれ」

「…これは想像以上に凄まじいわね」

「省吾…また一段と腕が上がったな」

「中華料理だけだけどな、いいから早く食べようぜ」

「正直驚きなのは作りに行ってから40分くらいしか経ってないのにこの量って…ある意味誠悟より規格外ね」

「な？言っただろ」

「早く食べてくれよ、冷めたらおいしくなくなっちまうから」

「そ、そうね。じゃあいただきます」

そういつて聖良はまず麻婆豆腐から手を付けた。

「はむっ、ん！…う、うまい…ていつかうますぎるわ」

「そりゃよかった。さあ、誠吾も食べてみてくれよ」

「ああ、はむっ、…やっぱり中華じゃ勝てないな、うますぎるよ」

聖良はこれ以降喋ることなく八宝菜やチンジャオロース、餃子や酢豚などにも手を出していた。

誠悟はいろいろ食べるたびにこの味はどうやって出してるんだなどと俺に聞きながらも、どんどん食べていった。

瑞希はいつも通り、自分の分はしっかり確保してゆっくり食べてい

た。

そして卓袱台の上にあった料理は10分程度で無くなった。

「ふう、ごちそうさま！凄く美味しかったわ！」

「そりゃよかった」

「でもやっぱり悔しい、戦いでも勝てないし、料理も勝てないし……ちなみに省吾って勉強はどうなの？」

「そ、それはちょっと言いにくいんだが……」

「まあ、編入試験で分かるよ」

「ふーん、でもその感じなら勉強なら勝てそうね」

「ははは……」

俺が返答に困っていると誠悟が小さい声で言ってきた。

「自慢にみたいになるから言わないんだろうけど、編入試験の結果だともしかすると聖良が切れるぞ」

「で、でも話しくいし……」

「ちょっと？何こそこそ話してるのよ」

俺たちの不審な行動に聖良が突っ込む。

「な、なんでもないよ?」

「そうそう、ただ誠悟が聖良の惚気話をしてきただけだから」

「なっ、ちょっと誠吾!?!なんつう話ししてんのよ!」

聖良が少し顔を赤くしながら話してくる。

「ちょ、省吾お前!?!」

「すまない、聖良の性格だと多分言うまで追求してくるから、その打開策だ」

「打開策で俺を使うなよお!?!」

誠吾の語尾が少し変になったかと思ったたら聖良が誠悟に抱きついていた。

「ちょ!?!聖良!?!」

「だーめ?」

「いやっ、駄目じゃないけど…」

すると俺にちらっと視線を向けてきた。いかにも助けてくれという感じで。

「よし、じゃあ瑞希、俺たちは洗いものでもするか。誠吾たちは一緒に風呂でもはいつてこいちゃ」

「うん！そっだね。洗い物しよ」

「ちょ！？省吾お！瑞希ちゃん！」

「ありがとう、省吾、瑞希ちゃん。じゃあ行きましょ、せ・い・い」

そう言つと聖良はずるずると引つ張って行った。

「お、お助け〜！！！！」

その後一時間してから風呂から出てきた誠悟はげっそりしていて、聖良は逆にすっきりした顔で出てきた。

「やっと出てきたか、長風呂はあまりお勧めできないぞ？」

「省吾…お前分かって言ってるのか？」

「何のことだ？」

俺は物凄い笑顔で答えてやった。

「もっいいよ…」

「ふう、お待たせ、ごめんね省吾。気を使わせちゃって」

「何言ってるんだ、気にすんな。それより今からデザート持ってきてやるから待ってる」

「デザート！分かったわ！」

それだけ言っただけ俺は再び台所に戻った。ちなみに瑞希はこの間にデザートを作っていたのだ。

「瑞希、できたか？」

「うん！今持ってくるから」

「あいよ、俺も手伝うよ、一人じゃ大変だろ？」

「うん、ありがとお兄ちゃん」

俺は瑞希が作った杏仁豆腐を持って行った。

「お待たせ」

「おっ、来た来た」

「すみません、遅くなりました」

卓袱台に持ってきた杏仁豆腐を並べた。

「これって杏仁豆腐？」

省吾「そうだ、杏仁豆腐を食べるのは初めてなのか？」

「そうね、コンビニとかにあるのを見るけど食べるのは初めてよ」

「俺は省吾の杏仁豆腐を食べるのは久しぶりだな」

「この杏仁豆腐は瑞希が作ったやつだぞ？」

「ええっ！？瑞希ちゃんか？」

「はい、お口に合うかわかりませんが…」

「味は保証するぞ、瑞希の趣味はお菓子作りだからな、他にもクッキーやらケーキとかも作れるぞ」

「瑞希ちゃん！今度教えて！」

「は、はい！私なんかでよければ」

「ありがとう！誠悟に教えてもらうのは何か負けた気がして聞けなかったのよね」

「どういうことだよ、負けた気がしたって」

「まあまあいいじゃないか、瑞希もうれしそうだし」

いつも俺がいろいろ教えたりしてるからな。教える側に立つのはうれしいだろ。

「それそうと省吾、そろそろ話を聞かせてほしいんだけど」

「ああ、そうだったな。まあ話すって言うてもそんなに面白い話じゃないぞ」

「そんなことは瑞希ちゃんのあの時の顔見てれば分かるわよ。でもこういうのは人に話した方が楽になるもんでしょ？」

「そつだな、じゃあ話すぞ」

.....

「出ていけ！このくそガキどもが！」

「ぐあっ！」

「お兄ちゃん！」

「ちょっとあなた！子供たちに当たるのはやめて！」

「うるさい！こんな大人の言うことなんぞ聞けん奴らなど、私の子供でも何でもない！」

「で、でも……」

「なんだ？お前も文句あるのか？」

「……いいえ、何ありません」

俺たちはこういう理由でよく家を追い出されていた。母さんも父さんには逆らえなくて、俺が瑞希だけでも、といつても無視をされた。

「いいか、しつかり反省するまで家の敷居を跨がせんからな。次逆らったら殺すぞくそガキども」

こう言い残して父さんは家のドアを閉めた。

「くっ、いてえ……あのくそ親父め」

「お兄ちゃん…大丈夫？」

「ああ、これでも毎日道場に通ってるからな。これくらいなら大丈夫だ」

当時14歳だった俺は父さんの言うことがうつつとうしくてこうして反抗しては怒られて、それでも反抗したくなる歳だったんだ。

でも居合をしている父さんを見ると、何故か憎い気持ちとかは無くなっていた。それくらい居合をしている時の父さんはかっこよかった。

しかし最近は転勤続きでストレスが溜まっているのか、小さいことでよく怒ったりして俺に当たって反抗して追い出されるの繰り返しだった。

「それよりまた野宿になっちまうけどいいか？」

「うん、いいよ」

瑞希まで追い出されるのは俺をかばうからだ。いつも庇わなくていいっていうのに瑞希は「あんな家に居るくらいなら…」と言って俺と野宿をしていた。

このときから俺たちの心の中に大人なんて…という感情が芽生え始めていたのだ。

.....

「だから正直親たちが交通事故死んだ時もあまり悲しくなかったかな」

「…なんか省吾って凄いわね、そんな人生送ってるのにこんなにも強く生きてるなんて」

「そんなことないよ。それより誠吾たちの話も聞かせてくれないか？例の廃校問題の話とか」

「どうしてそのことを知ってた？」

「俺らの親代わりになる人がそう言ってた。廃校問題を解決したのは誠悟だったこともな」

「そっか、でもあの廃校問題には色々と裏があったからな…」

「そうね…」

再びしんみりとした空気になる。よほど色々なことがあったんかな？

「でもまあ省吾になら話してもいいかな」

「そうね」

「表向きには廃校問題となっていたんだが…」

その後いろいろ聞いた。

春樹が凄い事故に巻き込まれ、意識不明になったこと、

誠悟の親父さんは所長のせいで研究の改竄をしたこととか。

生徒総会でその研究が実用化不可能なのを発表して、島民に大反発を受けたこと、

そしてこの島の権力者である内海家に守ってもらっていることなど。

「まあ、こんなところかな」

「誠悟の方が凄じじゃないか、島のために自分をそこまで犠牲にできるなんてそう簡単にできることじゃないぞ」

「あの時は必至だったからな、なにより春樹があんな目にあつたのに黙ってみていられなくなったから。もとは特に廃校問題のことを気にしてなかったんだぞ？」

「誠悟！悪い癖出てるわよ！褒められてるんだから素直に受け取りなさいよ」

「相変わらず自分のことは二の次みたいな考えは変わっていないんだな」

「俺はそんな風に考えているつもりはないんだが…」

「でも誠吾さんのそういうところ、私はいいと思います。それが誠吾さんの優しさだと思っから」

「確かにね、だから誠吾に惚れたんだけどね」

「だからさらっと恥ずかしいこと言っな！」

この後も他愛のない会話をして、俺は居間で、瑞希は美琴ちゃんの部屋で泊めてもらうことになった。

誠悟と聖良が部屋に行った後、俺と瑞希は勉強をしていた。

「瑞希、これ使え」

俺は瑞希に一冊のノートを渡した。

「これって例の？」

「とりあえずこれを元に今から勉強してみろ、多分合格できるはずだから」

「大丈夫、お兄ちゃんの前想問題は大体当たってるから、ありがとうね」

「そんなこと気にすんな。さあ、今から二時間集中してやるぞ」

俺たちはそこから二時間ぶっ通しでやり続け、それぞれ床についた。

昔の話（後書き）

今回は省吾の過去を紹介しました。

正直内容がまとまらずごちゃごちゃしていますが、分かる部分だけでも理解していただけるとありがたいです。

次回からは編入試験編です。いよいよ静奈さんと清美さんの登場です。

では次回。

編入試験（前書き）

お待たせしました。前回の話で静奈さん達を出すつもりでしたが、章が長くなりすぎるのはどうかと思いましたので今回から登場となります。

といってもほとんど出ないですが…紹介ぐらいです。

でも静奈さんたちは後半くらいに活躍していただく予定ですのでもよろしく願います。

編入試験

「…う…ん？」

あれ？ここはどこだ？見慣れない卓袱台が…って誠吾の家だったな

「まだ誠吾も起きてきてないのか？」

ふと時間を見てみると、時間はまだ朝五時だった。外も見るとまだ薄暗かった。

「まあいつもの癖だからな、いつもなら素振り始める時間だし、そうだ！まだ時間もあるしとりあえず剣を振ってくるか」

俺は鞆の中から動きやすいジャージを取り出して、玄関に回って靴を持って庭に出た。

「意外と広くてよかったよ、でも近くにいろいろあるから気をつけるか、…ふう…はあ！」

まず抜刀の感触を確かめ、そのあとイメージしながら素振りをしていく。

その一連の動作を済ませたら納刀し、また抜刀を繰り返す。

「ふん！はあ！」

「ふーん、そうやって毎日稽古してるんだ、だから強いよね」

「うわっ！聖良！？いつからそこに!？」

突然過ぎて思わず手を止めてしまう。

「いやね、目が覚めちゃったからとりあえず下に行こうと思って、
んで行ってみたら庭から声がしたから…」

「そ、そうか」

あんまり見られなくなかったけどな、まあ仕方がないか。

「省吾って、どこかの道場で剣術習ってたのよね？」

「ああ、けど真剣に関してはほぼ自己流かな。少しは父さんの見よ
う見まねがあるけど」

「ふーん、どうして佳代子といい省吾といい剣が使える人って強い
のかしら？」

「もともと真剣って腕の立つ人しか使わないからね、佳代子も物凄
い腕が立つし」

「それより省吾って意外と恥じらいがないというか…」

「なんだよそれ、変態とでもいいたいのか」

「いやだって佳代子のことと呼び捨てだし、私も呼んでいいって言
ったらすぐに呼び捨てにするし…そういう恥じらいのないのかな、と」

「ああ、そういうこと、まあ俺は呼びやすい方で呼ぶからな、篠原

って言うより聖良の方が短いし、佳代子にいたっては苗字を聞いてないし、そういえば三木さんも名前聞いてなかったな」

「あれ？まっちゃんはさん付けなんだ」

「あの人はあーいう馴れ馴れしいのは嫌いそうだしね、しかも名前も知らないし」

「ふーん、省吾って意外と人の事見てるのね、あつ、ちなみに佳代子の名字は加納で、まっちゃんの名前は真智子よ」

「ああ、悪いな。真智子か…」

どっかで聞いたことある名前だな…なんだろう？

「どつたの？まっちゃんのことでなんかあった？」

「いや、どっかで聞いたことあるような…三木さんの家ってなんかやってる？」

「まっちゃんの家？確かあそこの家は神社だったはずよ」

神社、三木真智子…

「…いや、気のせいみたいだ、気にしないでくれ」

「そ、んじゃあそろそろ中は行ってきなさいよ、もうあれから30分経つよ」

「てか二人して何を話してたんだ？」

「きゃ！誠悟！いるんなら言いなさいよ！」

「いや、居るも何も今起きたんだが…省吾も外で何やってんだ」

「真剣の稽古」

「危なっかしいからできれば控えてくれよ、物壊されると困るから」

「分かってるよ、んじゃあ戻るよ」

「ああ、ついでにガスつけてやるからシャワーでも浴びて来い」

「ああ、サンキューな」

俺は玄関の方に回り、誠吾の家に入って行った。

そしてそのままシャワーを浴びた。

「ふう、さっぱりしたっと」

「省吾、弁当だけどうする？俺が作るか？」

「いや、今日くらいは俺に作らせてくれ、お礼も兼ねてな」

「そうか、んじゃ、任せるわ。先に朝飯食ってるから」

「しかし誠吾って朝早いのか？別に焦る必要もないのに」

「いや、いつもはもっと遅いんだがな、聖良が居なかったから起き

ただだよ」

「そっか、まあゆっくりしてくれ、美琴ちゃんの方も作った方がいいか？」

「そうだな、よろしく頼むよ」

「ああ、任せとけ」

俺はすぐに台所に向かって、料理を開始した。

そして1時間後…

朝7時、居間に向かうと、すでに瑞希も起きていた。

「あ、お兄ちゃんおはよう！」

「おはよう、昨日はよく寝れたか？」

「うん！ばっちりだよ、試験も何とかなるって安心できたし」

「そっか、よかったな、朝ご飯作ったからすぐに食べるぞ」

「うん、ありがとう」

「ちゃんと誠吾にも礼を言うんだぞ、泊めてもらった上に食材までもらったんだから」

「分かってるよ」

「所で肝心の誠吾は？」

「誠吾さんたちは部屋に行ったよ。今日から期末テストらしいから少し勉強してくるって、準備できたら呼んでくれって言った」

「今日からテストなのか、何か悪いことしたかな」

「私がそれ言ったら聖良さんが、「誠吾も私も頭いいから大丈夫よ」だって」

「まあ、確かに聖良って天才肌だし、誠悟が頭良いのは知ってるし、そんならすぐに飯食って準備するか」

「はい！」

俺たちはすぐに飯を食った。といっても早食いが得意なわけではないので10分くらいかかったが…

「よし、洗い物も済んだし、瑞希、誠悟達を呼んできてくれ」

「分かった！」

瑞希は元気そうに階段を上がって行く。昨日は少し気落ちしていたが今日は心配なさそうだな。

「じゃあ弁当も全員分持ったし、先玄関に行つとくか」

俺は弁当を持って居間に置いてある鞆も持って玄関で待機した。

「お兄ちゃん、呼んで来たよ！」

「お待たせ、悪かったな待たせて」

「いやいや、そんなことないよ。それより昨日今日とありがとうな、おかげで助かった」

「気にするなよ。とりあえず住むところ決まるまで居ていいからさ」

「いや、そういうわけにはいけないんだけど…せめて瑞希だけでも頼むわ」

「何遠慮してるのよ、泊っていつて良いつて言ってるんだから泊っていけばいいじゃない」

「俺は貸しを作るのは嫌いなんだ」

「俺は貸しを作ってるわけではないんだが…」

「そうでなくても俺は許せないんだ。でも家が見つかるまでは瑞希だけは頼むよ」

「だからって…」

「分かったよ、ただし無理はするなよ。困ったら頼ってくれればいいから」

「ちよっ！誠悟!？」

「ありがとう、聖良も気遣いありがとうな」

「お兄ちゃん、私は一人で誠吾さんの家にお世話になるなんて真似できない…それなら私もついて行く」

「瑞希…」

「まったく、瑞希ちゃんの気持ちを考えてあげなさいよ。そんなので納得する子じゃないことくらい分かってるでしょ？」

「…そうだな、じゃあ誠悟、とりあえず家が見つかるまでは世話になるがいいか？」

「俺は全然構わないよ」

「本当にすまない」

「さあさあ、もうこの話は終わり！遅刻するからさっさと行くわよ」

「そうだな」

「あつ、じゃあこれ今日の弁当だから」

俺はナプキンで包んだ弁当箱をみんなに渡した。

「ああ、サンキュー」

「今日はどんなものか楽しみね、わんに取られないようにしななきゃね」

「わんこ？」

「気にするな。いずれわかるから。じゃあ行くつぜ」

俺たちは誠吾の家を後にし、みんながいつも集まるという場所までついて行った。

数分して商店街の近くまで来ると、人影が見えた。

「誠悟に篠原さんと…何故に省吾と瑞希ちゃん？」

「昨日いろいろあってな、一泊させてもらったんだ」

「美琴に藍ちゃん、おはよー！」

「おはよっ、瑞希」

「瑞希ちゃん、おはようございます」

「あっ、美琴ちゃん、これお弁当作ったから」

「省吾さんがですか？」

「誠吾じゃないから心配か？」

「いえ、むしろうれしいです。省吾さんって料理できたんですね」

「できるも何も省吾は俺の料理の先生だぞ？」

「省吾が！？誠悟に料理を！？」

「ということとは誠吾さん以上の腕の持ち主なんですか？」

「中華料理ならね、全般だったらあまり自信ないかも」

「省ちゃん！今すぐ私にその弁当をよこしなさい！」

「何故に命令形！？てか彩は自分の弁当あるだろ！？」

「だってせいちゃん以上って…もう食べずにはいられないよ！」

「そんなことより早く行くわよ！遅刻しちゃうから！」

聖良が急かしたのでみんなは学院に向けて歩みを進めた。

そして生徒玄関前、

「じゃあ俺たちは編入試験受けてくるから。みんな期末試験頑張れよ！」

「ああ、省吾も頑張れよ」

俺たちはそれぞれ別れ、俺たちは職員室に向かった。

コンコン、

「失礼します。編入テストを受けに来ました」

「失礼します」

「君たちね、誠吾君のお友達の子って。私は坂本裕子よ、誠吾君のクラスの担当教師よ」

「よろしくお願ひします、坂本先生」

「よろしくお願ひします坂本先生」

「ああ、なんだか坂本先生っていい響き」

「えっ、どういうことですか？普通にそう呼ばれないんですか？」

「だってゆっこちゃんよ！先生なめられてるのかな…」

少ししよぼくれてしまった坂本先生。しまった。変なとこに触れちゃったかな

「と、とりあえず編入試験の方お願ひします」

「うん、じゃあこっちについてきて」

坂本先生の案内で、少し離れた空き教室に来た。

「じゃあテストは五教科総合問題よ。一科目大体六十点で三百点満点よ、じゃあ問題冊子と答案用紙を渡します。テスト時間は二時間です。二時間たったら戻ってくるから、じゃあ始めていいよ」

坂本先生の合図で受け取った問題を俺と瑞希は解き始めた。

そして順調に問題を解いていき、あつという間に二時間たった。

俺が見直しをしていると坂本先生が戻ってきた。

「はい、終わりです。じゃあ答案用紙だけこっちに持ってきて」

そう言っただけで、俺たちの答案を回収した。

「じゃあすぐに採点するから、机に座って待ってて」

そう言っただけで俺たちの答案を採点し始めた。てかその場で合否が分かる形式なんだ。もし落ちてたら物凄い残酷な感じになるな。そいやあ、これ終わったら家探さないと。いつまでも誠吾の世話になるわけにはいけないし…

そんなことを考えながら数十分が経った。

「あの…山宮君？まさかカンニングでもした？」

「ちよっ！何言い出すんですか！なんで編入試験でカンニングなんてしにやなんですか！」

「だって…君の答案用紙満点だし…」

そう言っただけで俺の答案用紙を見ると確かに全て丸で300と書かれていた。

「お兄ちゃんって実は塾の講師してたんですよ、だからこのくらいのテストなら簡単に満点取っちゃうわけですよ」

「それなら納得、というかもカンニングしてたなら瑞希さんも満点のはずだしね」

瑞希の答案用紙を見て、坂本先生は納得していた。

俺も答案用紙を覗くと、278と書かれていた。

「まあでも二人とも合格だよ！おめでとう！じゃあ次にクラス決めるから、このくじ引いて」

「くじですか？」

なんて適当なクラス決めなんだ。でもできれば誠悟と一緒にいいな…

「あつ、瑞希さんは自動的に伊藤君の妹さんと一緒になるから」

「じゃあ何故俺だけくじ決めなんですか？」

「んとね、二年生に居る君の知り合いは1組2組ともに居るからいいんだけど、一年生で瑞希さんの知り合いって2組にしか居ないからよ」

「それなら仕方がないか…じゃあ引きます」

俺は先生が持っていた割り箸をひとつだけ引いた。するとそこには1組と書かれていた。

「1組ということは篠原さんと三木さんが居るクラスね」

「じゃあ誠悟はいるんですね」

「居ないよ？誠吾君は2組で私の担当だから。だから今から山宮君は教頭先生の所に行つてきて。1組の担当教師だから、瑞希さんは今村先生の所に行つて来てね、これから帰りのホームルームがある

から」

「誠吾と離れちまったか…まあ聖良と三木さんが居るからまだまし
か」

その後俺たちは答案用紙を貰って、各先生の所に行った。

俺は教頭先生の所に向かった。

「やあ、君が山宮省吾君だね、これからよろしく」

「よろしくお願いします。教頭先生」

「いきなり聞いて悪いんだけど…それって自毛なのかな？」

教頭先生は俺の髪の毛について聞いてきた。

「やっぱり気になっちゃいますよね、まあ銀髪ですからね、一応こ
れは自毛です」

「そうか、自毛ならいいんだ。いやあ、私は一応風紀委員会の顧問
だからね、もし染めてるのなら注意しなきゃいけないからね」

「すみません、まぎらわしい髪の毛で」

「いいんだ、気にしないでくれ。それよりこれから帰りのホームル
ームだからそこで君の紹介をしなくちゃならないからついて来てく
れるかい？」

「はい」

「よし、じゃあ行こうか」

俺は教頭先生の後をついて行った。そして2年1組と書かれた教室の前まで来ていた。

「じゃあ私が呼んだら入って来てくれ、それで簡単に自己紹介してもらおうからね」

「はい、分かりました」

それだけ言うと教頭先生は教室に入ってしまった。

「じゃあ、ホームルームを始めます。連絡事項としてはそろそろ文化祭ですので、出し物を決めておいてください。あと今日から編入してくる仲間を紹介します」

それを言うと少しざわつく、そして男子は女子コールを、女子は男子コールをし始めた。

「みなさん落ち着いてください！男子には気の毒ですが、編入生は男子です」

すると男子からのブーイングの嵐が聞こえてくる。一方女子からはいろんな声が聞こえてきた。

「では、山宮省吾君、入ってきて」

先生から合図があったので俺は深呼吸をして教室のドアを開けて中に入った。

するとあれだけうるさかった教室内が一瞬で静かになった。

俺はとりあえず教卓の近くまで行った。

「初めまして、先生から紹介をいただいた、山宮省吾です。東京からこの学校に編入してきました。まだまだこの島に来てから日が浅いので、いろいろ教えてくれるとうれしいです。よろしくお願いします」

俺が話し終わると一人の女子生徒が手を挙げた。

「質問してもいいですか？」

「まあ、少しくらいならいいかな、じゃあ5分だけ質問タイムにします」

「山宮君って東京から来たって言ったけど誠吾君とは知り合いなんですか？」

「はい、誠悟は僕の親友です」

「はいはい、昨日風紀委員といざこざ起こしたのって山宮君なんですか？」

「恥ずかしながら…」

「お前だったのか！？くっ、問題児がうちのクラスに来るとは！」

そう言ったのは昨日校門で出会った風紀委員だった。

「問題児？失礼ですね、問題なのはあんな横暴してる風紀委員の方なんじゃないんですか？一方的に自分の意見を押しつけて、教頭先生、一度風紀委員の態度を見直した方がいいですよ」

「なっ！貴様！」

「あんたはいちいち突っかかるな！」

パシーン！

しびれを切らした聖良が突っかかってきた風紀委員の方をひっぱたいた。

「な、何をするんだ篠原！」

「貴重な質問タイムが無くなるから無駄にするなって言うてんのよ！」

「そーだそーだ！文句なら後にしろ！」

教室内にブーイングが飛び交った。

「なんかこれ以上続けると永遠に終わりそうにないので、残りは放課後にでもやってください。あと文化祭の実行委員は今日中に原案を決めておいてください、ではこれで終わります」

それだけ言い残して教頭先生は教室を出て行った。

「ははは…」

「ちょっと黙らんかい！」

聖良の怒号により教室内が一気に鎮まる。

「よし、とりあえずやることやってから質問タイムにしましょ。というわけで、文化祭の出し物を決めます！あつ、省吾もどっか適当に座って。そうね…そこに座って、んであんたは風紀委員の仕事に行ってきたさい」

「なあ！？そんな横暴な！どう考えても俺がどっか行く必要はないだろう！」

「そうね、山宮があなたかって聞かれたら私も山宮を取ると思うわ。」

「ちょっと、三木さんまで！？」

「というわけで、いってらっしゃい」

「くっ、世の中不公平だ！…！」

完全に捨て台詞臭い言葉を言って教室から出て行った。

「あ…いいんですか？ほおっておいて」

「いいのいいの、本当に今日風紀委員の当番なのはあいつらの班だし、それにあいつがいたらまた喧嘩になりかねないでしょ？」

「しゅもつともです」

さっきもつい突っかったし。

「それよりどうするの？まだ文化祭の出し物決めてないのうちのクラスだけよ」

「それなんだけど…うちも誠吾たちみたいに屋台にしようと考えてるのよ」

「それは無理じゃない？屋台をやるなら伊藤君のクラスたちを何とかしないとイケないのよ」

「伊藤は完全に主夫だしな、どう考えても勝ち目が…」

「それなんだけど…うちは今日、最強の切り札を手に入れたわ、それはこの人、山宮省吾よ！」

「屋台やるなんて言い出す時点で俺に来るのは分かったけど…」

「でも山宮君って料理できるの？ちょっとできるだけじゃ伊藤君には勝てないよ？」

「そんなことなら心配無用よ、とりあえずこれを見て」

聖良が取り出したのは俺が朝作った弁当だった。

「とりあえず代表者としてまっちゃん！試食してみて」

「私が？わ、分かったわ」

そういつて俺が作った少し辛味のある唐揚げを口にした。

「こ、これは…程よい辛味が凄く美味しい…これって誰が？って篠原さんが持って来たんなら伊藤の弁当じゃ…」

「実はこれ省吾が作った弁当なのよ」

「えっ！？これが！？私一度だけ伊藤の料理を食べたことあるけど、これはそれ以上の美味しさよ！」

「省吾が伊藤の友達なのは知ってるわよね？実は省吾って誠吾の料理の師匠なのよ」

「伊藤君の師匠！？」

「てことは伊藤より料理がうまいのか！」

「なるほど…だからこんなにも…」

「しかも誠悟と違って身体能力あるし、まあ頭はどうなのか知らないけど…そうだ！省吾、その編入試験の答案用紙よこせっ！」

聖良の唐突な判断について行けず、手に持っていた答案用紙を奪われてしまった。

「えっと、何々…300点満点中、300点…」

「は？」

「ちょっと…どういふことよ省吾！昨日は誠悟より頭悪いって言う

「てたじゃない！」

「いやだって、誠吾ならこのくらいのテストすぐできるだろ？昔テ
ストの点で負けたこともあったし」

「ちなみに何回？」

「えっと…2回？」

「それじゃあ確実に省吾の方が頭良いに決まってんでしょっが！」

「ここの編入テストって確か神代大のテストくらい難しいって聞いた
ことがあるわよ」

「えっ！？神代ってそんなに頭良い学校なの！？」

「あんたは私らをバカにしてんのか！！」

聖良が思い切り拳を飛ばしてくる。

「ちょ…！…くっ！」

俺はとっさによけて、聖良の腕を掴んで腰に持って行った。

「きゃ！ちょっと痛いって！」

「あっ、悪い、つい…」

「すげえ、あの篠原を一撃で…」

「すごいわ！あの加納さんにさえ引けを取らないんじゃない？」

なんかどどん俺の理想像が出来上がっている…あんまり目立ちたくなかったんだけど。

「まあ省吾の凄いところの紹介はこれくらいにして、文化祭は屋台に決定！材料費とか詳しくは省吾と私とまっちゃんて話しておくから、じゃあ解散！」

聖良の解散の一言で生徒ははけていった。

「まったく、少しくらい俺の意見を聞けよ」

「いいじゃない、しかも今回は誠悟に運動以外で勝てるチャンスなのよ！」

「勝てる？」

「篠原さんはね、事あるごとにいろんな人に勝負を吹っかけてるのよ、まあ確かに体育祭の時の屈辱を晴らすには丁度いいかも…」

三木さんはそれを言うと凄い顔を恥ずかしそうにした。

「あの、何かあったんですか？」

「な、な、な、なんでもありません！」

明らかに動揺している口ぶりだった。

「実は私たち体育祭の時も勝負吹っかけたのよ。でその勝負に負け

て、罰ゲームとして私とまっちゃんがバニー姿で一日過ごしたのよ、それをただぶり返したから恥ずかしがってるのよ」

バ、バニーって…学校でなんちゅう恰好してるんだよ。仮にも風紀委員の二人が。

「いやあ、あん時のまっちゃんの顔ったらもう面白くてね」

「もうやめんかい!!!」

三木さんが怒号を飛ばしてきた。でも恥ずかしがってるせいか、あまり迫力がなかった。

……………(どうしてどこに行っちゃっの!?)

「!」

「ん?省吾どつたの?」

「い、いや、何でもない…」

今一瞬何かがフラッシュバックしたような…

……………(私は、あなたの事が…)

な、まただ!

「な、なんなんだ!?!」

頭の中からいろんな言葉があふれてくる!

「ち、ちょっと！しっかりしなさい！山宮！」

・・・・・・・・・・・・・・・・（いつかちゃんと戻ってくるよ！……ちやん）

俺は頭を抱えていた。もうどうしていいか分からないくらいのフラッシュバックが流れてくる。

・・・・・・・・・・・・・・・・（……うん、約束だよ、省くん！）

・・・・・・・・・・・・・・・・（うん！約束だ、まこちゃん！）

「ま、まこ……？」

「……えっ？」

俺は流れてきた名前をつぶやいた。すると三木さんが反応した。

しかしそこで俺の意識が途絶えた。

「う…ん…」

俺は目を覚ました。白い天井が見えたと思ったたらすぐに人の顔に変わる。

「お兄ちゃん！大丈夫？」

省吾「瑞希か…ここは？」

「保健室だよ、お兄ちゃんが倒れたって聞いて飛んで来たんだ」

「まったく、編入早々ここにお世話にならんでくれ」

そういつて白いカーテンを開けたのは白衣を着た女の人だった。

「はじめまして、保険医の榊だ」

「すみません榊先生、いきなりご迷惑をおかけして」

「まったくだ、お前が倒れたと聞いて伊藤兄達が押しかけて来たん

だぞ。もう困った困った」

「すみませんでした」

「冗談だよ、まあ軽い貧血だと思うが…今日は無理せず帰れ」

「分かりました、今って何時ですか？」

「今は三時だ、結構寝てたからな、伊藤兄たちなら今生徒会室に居ると思うからとりあえず顔だけでも見せて来い。伊藤兄は心配性だからな」

「分かりました。ありがとうございます」

俺は保健室を出て生徒会室を目指した。ちなみに瑞希には教室に行つて荷物を取つてくるよう言った。

数分後、少し迷つたりしたが一応生徒会室前に着いた。

コンコン、

「失礼します」

俺は扉をあける。

すると仕事をしている誠吾と久志と藍ちゃん、そして女生徒が三人いた。

「ん？誰だお前は？何の用事でここに来た」

俺に気付いた女生徒三人の内の一人が近づいてきた。制服を着崩して、リボンを手で巻いていた。

「省吾か！？大丈夫だったか？」

さらに俺に気付いた誠悟が声をかけてくれた。

「誠悟、お前の知り合いか？」

「はい、今日編入してきた山宮省吾ですよ」

「初めまして…えっと」

「私のことは清美と呼んでくれ」

「分かりましたが…苗字は何なんですか？」

がしっ、

「その辺は気にするな、なっ？」

「わ、分かりました、清美さん」

肩を掴まれて、物凄い形相でこっちを見てきた。よっほど苗字に何かあるんだな…

「あなたが誠吾君のお友達の山宮省吾君ですね」

今度はほんわかな雰囲気のある人が近づいてきた。

「初めまして、私は内海静奈つていいいます、よろしくお願いします」

「ご丁寧にも、改めて、山宮省吾です。よろしくお願いします」

「はい、それで、山宮君は誠吾君の東京でのお友達なんですよね？」

「はい、同じクラスで親友でしたから」

「もしよろしければ今度東京のお話をお聞かせください！」

「東京の話ですか？」

「はい！」

そんな期待の視線で見られると断れない…まあ断る義理もないのだが

「分かりました。俺の知ってる限りでしたら教えますよ」

「ありがとうございます！山宮君！」

「静奈、いい加減仕事に戻れ」

「はい、分かりましたよ」

そう言っつて内海さんはまた机に戻っていった。

すると今度はショートヘアの頭に可愛らしい髪留めを付けた子が来た。

「あなたが山宮君だったのね、初めまして、二年一組の橋本優喜で

す。よろしくね」

「ああ、よろしくな優喜」

「うーん…」

「ん？どうした？俺の顔になんか付いてるのか？」

そんなにまじまじ見られると恥ずかしいのだが…

「うづん、聖良の言つとおり、誠吾君とはまた違うタイプだなんて」

「違うタイプ？」

「だって山宮君、初対面なのにいきなり名前で呼び捨てでしょ？」

「いやなら名字で呼ぶが…」

「あつ、うづん違うの、誠吾君は最初は苗字にさん付けだったから」

「俺は呼びやすい名前で呼ぶだけだよ、それに他人行儀になるのはあまり好きじゃないんだ、わざわざ同級生にかしこまる必要があるか？」

「なんとというか聖良みたいで、誠吾君みたいな感じね、そんな風だと聖良に目をつけられるよ？」

「心配しなくてももう目につけられたよ、昨日聖良に勝っちゃったからな」

「ええ！？聖良に勝ったの？ちなみに何の勝負？」

「武器での勝負だよ、あん時は三木さんもいたけどな」

「なるほど、だから聖良が昨日佳代子みたいなのが一人増えたって
言ってたんだ」

「確かに佳代子は強かったよ、結局引き分けだったし」

「加納さんとも戦ったんだ…あ、それより三木さんがここに来たら
教室に来てって」

「三木さんが？」

「いったい何の用だろ…まあでもどうせ荷物を取りに行くしな。」

「分かった、じゃあもう行くよ」

「でも不思議だよ、あの三木さんが私用で男の子を呼びだすなんて
…」

「ん？なんか言ったか？」

「ううん、何でもないよ、早く行ってあげて」

「ああ、じゃあ誠悟先に帰ってるからな」

「ああ、鍵は空いてるから勝手に入ってるからいいから」

「了解、というか施錠くらいしろよ」

俺は一礼して生徒会室を出て、すぐに教室に出た。

「三木さんか…」

さっき白昼夢に出てきたのは誰なんだ…

俺はまこって呼んでたよな、

「一体何が引つかかってんだ？」

とりあえずその事はあとにしよう、もしかしたら思い出すかもしれないし

俺は教室前まで来ていた。

「まあ悩んでも仕方がない、とにかくまずは三木さんとの用事を済ませよう」

俺は教室の扉を開けた。

編入試験（後書き）

さて、今回と次回でフラグが立つわけですが…なんとも分かりやすいフラグの立たせ方ですね（笑）

予想は付いていると思いますが言つのもどつかと思つので次回をもうご期待してください。

再会する二人（前書き）

ちよつとこの章の話はごたごたしていきなり分かりにくいですがあしからず。

再会する二人

「三木さん？いますか？」

俺が教室のドアを開けると少し奥の机にうつぶせになっている三木さんがいた。

「寝てるのかな？」

俺はそれを確かめるためにそろりと近づいて、顔を覗き込んだ。

「すう…ふう…」

ゆっくりと寝息を立てて寝ていた。

(これじゃあちよっと起こすのは忍びないな…待つか)

俺はすぐに携帯を取り出して瑞希にメールした。

「すまない瑞希、ちょっと用事が出来たから誠悟達の所に居てくれないか？誠悟達は生徒会室に居るから」

送信してからすぐに返信が返ってきた。

「了解、でもあまり無理しないでね」

俺もすぐに返信した。

「分かってるよ、もし俺が来なかったら誠悟達と帰っていいから」

俺がすぐに返信するとまたすぐに返ってくる。

「了解」

「なんともあっさりした内容だな、まあそんなにいっぱい返す内容でもないがな」

俺は携帯を閉じ、三木さんが目を覚ますまで待つことにした。

...

「省ちゃん！待ってよー！」

「いいよ、でもまこちゃんって歩くの遅いんだね」

「省ちゃんが早いんだよお！」

懐かしいなあ…私が小学生ころの夢かしら？

あの時山宮が言った一言、まこって単語…

もし私の記憶が正しければ、山宮はあの時の省ちゃん…

容姿とかは変わってたけど、性格はあんまり変わらない…

あの頃の大好きだった省ちゃんだった。

そんなことを思うと視界が白くなっていく、

真智子視点

「う…ん」

「おっ、よっやくお目覚めか？」

「や、山宮…？」

「まったく、人呼んどいて寝てるとか、どっという神経してるんだよ」

彼はそう言って笑った。笑顔もあの頃のまま、とても輝いている。

「それより山宮は大丈夫なの？」

「ああ、軽い貧血だって、気にするまでもないよ」

「そう、よかった…」

「それより用事って何だ？優喜から教室に行けって言われたんだけど」

「そ、それは…」

私が呼んだ理由、それは彼が私の事を覚えているかということ。

彼が倒れる直前に発した「まこ」という言葉が気になってしょうがなかったからだ。

「それは？」

私は迷っている、もしたただの勘違いだったらショックが大きいからだ。私は何年も彼を待ち望んだ。伊藤が来た時も東京から転校生が来るって聞いて思わず心が躍った。

だけどその時は違った。

でも今回はいろいろ特徴が一致していた。特にあの銀髪。

彼のチャームポイントであり象徴でもあった。

「どうした？言いたいことは言えよ、三木さん」

「っ！？」

正直つらかった。多分彼は眼鏡をかけた私を知らない、それにあれからずいぶん経っている。

それでも「三木さん」と他人行儀っぽく言われるのは嫌だった。私は意を決した。

「山宮、いえ省吾。私を…三木真智子を覚えていますか？」

そう言っつて私は眼鏡を外した。

省吾視点

「なっ…」

俺は目を疑った。今俺の目の前に立っているのはまぎれもなくあの時の「ま」

「ま…」

するとまた頭が真っ白になる。そしてフラッシュバックしてくる。

「うわあああ…!!」

やめろ！頭が割れる！

コロシニジヨウヲモツナ、コノテキソコナイガ！

「な…んだ?…」

トキハナテ！チカラヲカイホウシロ！

「や、やめろ！ぐがああ！」

「省吾！」

コロセ！コロセ！コロセ！

「がああ…!!」

再び俺の意識はそこで途絶えた。

真智子視点

省吾が突然苦しみ出した。しかし頭を押さえてそのまま動かなくなつた。

「省吾…?」

私が声をかけると省吾はゆっくりと立ち上がる。しかし、

「省吾…どうしたの?」

「…」

省吾は何も言わずこちらを見た。しかしその目に光はなかった。

そして省吾は刀を抜いて一言言った。

「…クロス」

「なっ!?!」

そしてゆっくりとこちらに向かってくる。そして私の前まで来た。

「シネ」

省吾は刀を振り上げる。私は突然の事にまったく動けない。

そして刀は振り下ろされた。

ガキン!

「やめる省吾!つてこの目は!」

「か、加納さん…!」

「真智子！すぐに立ち上がって走れ！ここから離れる！」

「でも……」

「今の省吾に何を言っても無駄だ！」

「……ジャマダ」

「くっ！」

加納さんが少し吹き飛ばされる。

「聖良！援護を頼む！優喜と誠悟は真智子を！」

「ああ！」

「まったく！編入早々何してんのよ！……ってこの目！」

「ああ、私が理性を失った時と同じ目してる、気をつけろ、一筋縄ではいかないからな」

「んなことは私が一番しつとるわ！」

「……ザコガ」

「早く三木さん！聖良たちが時間を稼いでる隙に！」

私は誠悟と優喜に引つ張られ、教室を後にした。

佳代子視点

「はあ！」

私も刀を使って応戦する。しかし相手が相手だけに一撃も当てることができない。

「てやあ！」

聖良も応戦しているがすべて弾かれている。

すると省吾は一步下がりに納刀する。

「まずい！聖良！ガードを固めろ！」

「えっ！？」

「…ハア！」

「くうっ！！！」

なんとか省吾の抜刀術を防いだが、聖良へのダメージは相当なものだろう。

「今だ！はあ！」

しかし抜刀術は隙が生じる、そこを狙えば…

「！」

「なっ、くう！」

一瞬の凄まじい気圧で踏み込むことができなかった。

そして逆に隙の生じた私に省吾は再び抜刀術を出してくる。

私はとつさに刀を盾にして防いだ。

ガツキン！

「うわぁ！」

ガン！

私は抜刀の威力で壁まで吹き飛ばされた。

「佳代子！」

「くっ！よそ見るな！狙われるぞ！」

「…ハア！」

すかさず聖良に一撃を入れる。

「あっ！」

その衝撃でトンファーが吹き飛んでしまった。

「聖良！」

省吾は今がチャンスと連撃を加える。

「くっ！くっ！あっ！」

カランカラン、

「聖良！」

聖良を守っていた最後のトンファーが吹き飛んだ。

まずい！聖良がやられる！

「シネ！」

「…！」

「やめなさい！省吾！」

聖良の頭の前ギリギリで止まる刀、真智子の声で省吾が反応した。

「思い出して省吾！私よ！三木真智子を！」

真智子は省吾に近づきながら眼鏡を取ってそう言った。

「ク、クルナ！」

省吾がそう言うのが聞く耳も持たず省吾を抱きしめる。

「省吾、お願いだからあの頃に戻って！大好きだったあの頃の省吾に！」

「ア、ア、ア、…ま、ま…こ？」

省吾の眼は徐々に光を取り戻していた。

省吾視点

「省吾…よかった…」

「お、俺は一体何をして…！！」

俺は周りを見て驚愕した。

机はばらばらになり、傷だらけの聖良や佳代子がいた。

「やはり覚えていないか」

「やっぱり佳代子の時と同じね、まさかとは思っけど…」

（これは少し兄様に聞いてみるべきか…）

「まっちゃん！佳代子！聖良！無事か！？」

すると誠悟が焦りながら教室に入ってきた。その後ろから榊先生と美琴ちゃんが入ってきた。

「まったく、一体何があったんだ！美琴！篠原の治療を頼む！」

「分かりました、お兄！手伝って」

「ああ！」

誠悟たちは聖良に、榊先生は佳代子に治療を始めた。

「…まこ、俺は一体何をしたんだ？」

「覚えてないの？」

「…ああ」

「えつとね…」

まこからある程度の話は聞いた。どうやら理性が飛んで自分の中に眠る力が一時的に解放されたらしい、このことは前にも前例があるらしい、佳代子がそうになっていたらしいが…

「…俺が…まさか…」

この感じは…まさか記憶が…

「…とりあえず今日は帰ったら？」

「…そうだな」

「ちょっと待て山宮兄、どうしてこうなったか詳しく教えろ」

俺が立ち上がろうとすると佳代子の治療を終えた榊先生がそう言った。

「それが…」

「…榊先生、省吾は多分覚えていないと思います」

「…どうということだ？」

「省吾は理性がぶっ飛んでその時の記憶がないんですよ」

「山宮兄、そうなる前に一体何をしていたんだ？」

「まこに呼ばれてこの教室に来ました。それでまこが…」

「さっきからその「まこ」ってというのは誰なんだ？」

「私です、私と省吾は幼馴染なんです」

「ま、まっちゃんと省吾が幼馴染!？」

「まっちゃん? どうということなの?」

「わ、私が小さい頃に少しの間だけ来ていた子と仲良くなって…それが省吾だった」

「し、知らなかった…」

「当たり前よ、話したことないんだから」

「それでなんで理性が飛んだんだ？」

「昔は眼鏡をかけていませんでしたから、外せば思い出すかと思っ
て眼鏡を外したら…突然省吾が苦しみ出したんです」

「あの時確か誰かに囁かれたような…力がどうこうとか…」

「誠悟…」

「ああ、佳代子の時と一緒にだな」

「そうなるはやっぱり兄様が…」

「可能性がないこともないな、でも会うにしても連絡が取れないし…」

「ねえ省吾？佳代子にお兄さんなんていたっけ？」

「あつ、いやその…」

「いい、私が話す、私の兄様は廃校問題の時に居たサングラスの人だ」

「あの岡田って奴!？」

「ああ、岡田さんに会うには有馬に聞くのが一番だと思うが…あいつに聞くのはどうにも気が引ける」

「誠悟達は岡田さんを知っているのか!？」

「逆になんで省吾が岡田さんを知ってるんだ？」

「岡田さんは…あれ？」

頭の中にいろいろな情報が流れ込んでくる。昔の記憶だ。そこには

血だらけで倒れている人が映った。

「あ、あ、あ…」

そうか、思い出した…俺は人殺しを…それも含めていろいろ教わり、そして殺し屋として…

「どうした省吾？」

「お、俺…人を…殺したことがあるのか…」

「な、何を言い出すんだ山宮兄！」

「まさか記憶が戻ったのか!？」

「じゃあ省吾も岡田さんに記憶を…それが今になって出てきたのか」

「おそらく真智子と出会った時のショックだろう、あとは両親の死くらいか…」

「…いったい何がどうなってるんだ？」

「とにかく一度落ち着け、このことを話すと長くなるから…」

「そうだな、佳代子もそうだが聖良も傷だらけだし」

「事情はよく分からないがとりあえず今日は帰れ、教室の修繕は明日の朝にやればいいから、DIYクラブがな」

「お、俺達ですか？」

「当たり前だ！何のためのDIYクラブだ」

「わ、分かりました…」

俺たちが教室を出ようとする廊下を走ってくるような音が聞こえた。

「お兄ちゃん！」

「瑞希…」

「大丈夫！？一体どうしたの？」

「瑞希ちゃん、詳しくは家で話すからとりあえず帰ろう」

「は、はい。分かりました」

「あと三木さんも来てくれない？一番事情を知ってる人がいないと困るから」

「わ、分かったわ」

瑞希も合流し、とりあえず俺たちは誠吾の家に帰った。

再会する二人（後書き）

本当はゆっきールートにしたかったんですが、他の人がすでにそのルートで書いているのであえて三木さんルートで行きます。

あとこれからも戦闘シーンののは出てくると思いますが、そこは主人公が誠吾じゃなく省吾だからできるということであまり気にしないでください。

では次回は省吾の隠された闇についてです。

隠された闇（前書き）

投稿かなり遅れてしまいました…

なにぶん「あはえは」が楽しいもので（笑）

しかし「あはえは」を見てしまうかどうかでも被りそうになります
がとにかく頑張っておリジナル化させます。

では本編へどうぞ。

隠された闇

「とりあえず居間に上がって待っててくれ」

誠悟の言つとおりには俺達は卓袱台を囲んで待った。

ちなみにここに来たのは俺、瑞希、まこ、佳代子と聖良である。

美琴ちゃんは藍ちゃんの家泊まるらしい。

「とりあえず何か飲み物があつた方がいいと思ってお茶持ってきた」

そういつてみんなにお茶を配る。

ちなみにこんなメンバーな理由は、まず誠悟の家だから誠悟はいて、

佳代子と聖良は巻き込まれて俺の状況を知っているから、

そして俺と瑞希がいるという感じだ。

優喜は状況を知っているが邪魔者だからと言って来なかった。

「単刀直入に聞くぞ省吾、お前のあれは何時頃からだ？」

「…その辺はまだ気持ちの整理が…もう少し待っててくれ」

いろんな記憶が頭を駆け巡りすぎて訳分からなくなっている。

「あの…私心当たりならあります…」

「本当か!？」

「は、はい」

「ゆっくりでいいから細かく教えてくれ」

「実は東京に住んでいた頃、夜中に偶に玄関から誰かが出て行く音がしてたんです、ある日物凄く気になって死角から見えていたんですが…」

「それで?」

「刀を持ったお兄ちゃんだったんです。だからとっさにどこ行くか聞こうと思ったんですが…」

瑞希は少し震えていた。

「あの時、お兄ちゃんの目に光はなく、ただただ濁った目をしていました。それがとても怖くて印象的でした」

「間違いない」

「だったら後は確認だけだ。どうぞ入ってきてください」

「…ああ」

庭から来たのは岡田だった。

「兄様!?!何故ここに!?!」

「なにしに来たのよ!？」

佳代子と聖良が武器を構える。

「落ち着いてくれ、俺がさっき有馬に頼んで呼んだんだ」

「全く、あの地上げ屋が呼び出すから何かと思えば…お前は…」

「…岡田さん…」

「…どういことだ小僧、何故こいつがここにいる？」

「話せば長くなりますが、省吾の両親が亡くなって、親戚に引き取られたんです」

「そうか…」

「兄様、省吾に誘導催眠をかけたのは兄様なんですか？」

「ああ、いろいろ事情があったんだが…正確には掛けざるを得なかった」

「掛けざるを得なかった？」

「ああ、あの日は月に陰りのある曇り日だった」

「……………」

「や、や、やめてえ!…!」

「…ふん！」

ザシユ！

「あ、あ、…」

その人は力もなく倒れた。

「あ、あ、あ、…」

俺は声に気付き振り返った。

「貴様…見たな」

「くっ！」

少年は抵抗するように刀を抜いてきた。

「ほう…これを見てなお抵抗してくるか…いいだろう」

俺も構える。少年も刀だが刃が持ち主側に向いている逆刃刀だった。

「…ふん」

「はあ！」

ガキッ！

(臆することなく向かってくる姿勢、死を恐れない覚悟、面白い。殺すには惜しい存在だ)

「ふんっ！」

「ぐっ！っつ！」

弾いた時に少年の肩が斬れる。

「はぁ！」

しかしそれでも立ち向かってきた。

ガキッ！

「何故だ、何故立ち向かえる？」

「…俺がここで死ぬわけにはいけないからだ！それにあんたに勝てればこの力に自信が持てるかもしれないから！」

「…その年でそこまでとは…」

俺は力をさらに加える。

「ぐっ！」

「はっ！」

「あっ！」

少年の持っていた刀を弾いた。

そして首に刀を付けた。

「小僧、選ばせてやる、俺に殺されるか、ついて来るかだ」

「…さつき死ぬわけにはいけないとはいったはずだが…俺の力がこの程度なら…生きる意味がない、殺してくれ」

「…ふん」

俺は刀をしまつ。

「ついて来い、お前をもっと強くしてやる」

「えっ？」

「お前ほどの若い奴、そうそついな、何かを失って自棄になっているという眼でもない、なら強くしてやる」

「…敵のお前に何故そんなことを」

「お前には殺しをしまつ、その素質がお前にはある、だからついて来い」

「…聞いてなかったのか？俺が力を欲するのは人を守りたいからであつて」

「…じゃあ少々無理矢理だが来てもらおう」

俺は瞬時に少年の後ろに回り込み、手刀で気絶させた。

「なっ…」

バタッ

.....

「この後俺はこいつの強い心を利用し、人を殺すことを恐れぬ心へと誘導催眠をかけた」

「…あんたは…」

聖良が震えている

「聖良、今は抑えて」

「わ、わかってるわよ」

「そして俺はこいつに様々な力を与えた、こいつは乾いたスポンジのようにどんどん吸収して力を付けていった」

「…」

「しかしある日、こいつはその催眠をコントロールしてしまった」

「あの力をコントロールですか？」

「ああ、普通ならあの力に飲まれて精神が元に戻ることはない、だがこいつはその力をも凌駕した」

.....

「まさかこの催眠を解くとはな」

「よくも…俺の力を殺しなんか…ツカイヤガッタナ」

（口調が変わった？まだ完全に解けきつてはないのか…）

「…シネ」

その瞬間、省吾は俺の懐に入ってきた。

ガキツ！

「なっ、くっ！」

咄嗟に刀で抑えるが簡単に弾かれてしまう。

（違う！この力は俺の力では引き出せない驚異的な力、こいつが俺の催眠を超えた際にさらに強い催眠をかけたのか？）

「な、何事だ！」

「なっ、来るな！」

「えっ？ぎゃあ？！」

同業者がやってきた瞬間、省吾が逆刃を返して斬った。

「くっ、はあ！」

すかさず俺は省吾に連撃を加える。

しかし全て防がれてしまう。

その刹那、俺は後ろから吹っ飛ばされた。

「ぐあー！」

省吾が瞬時に回り込んで剣撃を入れてきた。

(い、今なら完璧に俺を斬れたはずだ…何故だ…)

「お、岡田さん…早く逃げ…カッテニデテクルナ！」

「なっ!?!」

省吾が一瞬出てきた、多分この力に翻弄されているんだろう。

「…てめえは少し黙ってる！」

そういつて省吾は身体を強ばらせた。

「はあはあ…」

「…」

「岡田さん…早く催眠をかけてください、この力を封印する…」

「…分かった」

俺はすぐに催眠誘導をしてこの感情に鍵をかけた。

・・・
「この後、省吾は同業者殺しでこの世界から追放、しかしこいつの抹消をしようにもこいつの力は絶大だったからあの感情と一緒に記憶を心の扉に閉じ込めた」

「・・・」

「しかし両親の死をきっかけに鍵が緩んでしまった、省吾、あの頃ぐらいからだろ、記憶が戻ったのは」

「・・・いえ、完全に思い出したのは今日、まこと会った時でした。漏れた記憶の一部と一致した衝撃で多分記憶の扉が開いたのかと・・・」

正直この記憶をまだ信じられないでいた。

俺は数多の人を殺し、殺人術にも手をかけた。

「そこでだ、今日俺は更に強めの催眠をかけに来た」

「・・・それで今までの記憶を閉じ込めるのか？」

「今回は少し違う、記憶を完全に抹消する。省吾は元からここに住んでいたという催眠をかけて東京でのことを全て消し去る」

「ちょ、それって!?!？」

「もちろん両親などの死の記憶も抹消する」

「・・・岡田さん」

俺は決心した。

「俺は再びこの力を凌駕出来るようにします」

「なっ！？…仲間を殺すかもしれないんだぞ」

その言葉を聞くと、一瞬躊躇いそうになるが、もつ心の内は決まっていた。

「確かに昔みたいに一人だったら催眠をかけてもらう方が妥当かもしれませんが、でも今の俺には仲間がいます。日は浅いですが、とても頼れる親友達ができた。迷惑掛けるかもしれない…それでもいいか誠悟」

「佳代子だって自分で乗り越えたんだ。省吾にだってできるはずさ、そのためならできる限りでなら力を貸すさ」

「もし力が爆発しても私が止めてみせる」

「私だってどれだけ省吾の力になれるは分からないけど、誠吾の親友だもん、ほおって置くなんてできないわ」

「どんなことがあってもお兄ちゃんの味方です！一緒にガンバる！」

「みんな…ありがとう」

「…私は今日みたいにあなたを止める義務があると思う、昔から思っている人として、そして何より省吾が私は…好きだから」

「まこ…」

「ま、まっちゃん…」

聖良が少し気まずそうに口を開く。

「真智子、それじゃあまるで…」

「…告白してるのと一緒にだよ」

「あっ…」

言ったあとからとても恥ずかしそうにしているまこ。

「まこ…ありがとう。俺もまこの事が好きだ。これからも頼むな」

「まさかの受け入れっちゃった!？」

「…ごほん!」

「あっ、すみません岡田さん。でもこれが俺の答えです」

正直にそう思った。まだ日が浅いのみんなが俺を信頼してくれる。この仲間たちなら乗り越えられる。

「分かった。だったら俺は文句は言わない、もともとこうなったのも俺の責任。省吾がそういうなら好きにする」といい

「ありがとうございませす!岡田さん」

「…じゃあ俺は帰る、小僧」

「は、はい」

「また1人増えてしまったが…頼むぞ」

「頼まれるも何も、俺は2人の親友ですから」

「ふっ、そうか。じゃあこれで帰る」

そういつと岡田さんは居間から出て行った。

そしたらいつの間にか夜になっていたのでとりあえず誠悟がご飯を用意してくれた。

それをまこと佳代子も食べていき、帰ることになった。

「じゃあ俺はまこを家まで送ってくる」

「うん、行ってらっしゃい」

「誠悟、私は1人で大丈夫だぞ？」

「でもあんな暗いところを女の子1人で歩かせるわけには…」

こっちは誠悟が佳代子を送っていくようだ。

「それに聖良が…」

「ああそんなことか、大丈夫よ。私が送るように言ったんだから」

「そういつことだ。だから行くよ」

「そういつことなら…お言葉に甘えるさせてもらいつ」

「じゃあ聖良、瑞希の事頼んだぞ」

「ええ、任せときなさい。それより…」

聖良がこっちに近づいてくる。そして耳元でつぶやいた。

「まっちゃんに言うことがあるんでしょ？それも済ませて来なさいな」

「なっ!?!」

まるで心を読まれたような感じだった。

「じゃあ性少年よ！青春を楽しめ!」

「聖良?どうしたんだ?」

「何でもないわよ、さあさあ行った行った!」

聖良に促されて、俺たちは誠吾の家を出た。

佳代子の家とまこの家は反対方向なので誠吾の家の前で分かれた。

(くそっ、聖良のせいで変に意識しちまうじゃないか…)

「省吾？」

「ど、どうした？」

「なんだか思い詰めた顔してたから…」

思い詰めたというか恥ずかしいのを顔に出さないためにしてただけ
なんだけどな、なんて言えるわけないし…

「本当に大丈夫？」

「ああ、気にしないでくれ」

「省吾、少し寄りたい場所があるんだけどいい？」

「ああ、いいよ」

真智子からのお願いを聞いて、行く途中にある波止場に行った。

「じじは…」

記憶にある限りだとまこと最後に話した場所だ。

「私たちの別れの場所よ。省吾と別れて以来ここに来ることはなかった…というより来たくなかったわ」

「どうしてだ？」

「だってここに来ると省吾を思い出して泣きそうになるから…でも今はもう大丈夫。だって省吾が帰ってきてくれて、もうここは再会

の場所になつたから」

とびっきりの笑顔で真智子はそう言った。

「そうだな、俺も何度思い起こしたことが、まこに会いたくて苦しかった。確かに本土の生活は充実していたけど…やっぱりこの島が一番だよ」

俺の口からどんどん本音が出てくる。やめようと思っても湧き出る言葉を止めることはできなかつた。

「なによりまこが居てくれたから、それが一番うれしかったよ」

「省吾…ねえ省吾？」

「なんだ？」

真智子が少し恥ずかしそうに下を向く。ちらっと見えたが顔が赤くなっていた。そして真智子の言いたいことが何となくわかつた俺は真智子より先に口を開いた。

「まこ、少し話を聞いてくれるか？」

「…うん」

「俺はまこを、いや、三木真智子を心から愛している。俺と付き合い合ってくださいますか？」

俺は真智子に告白をした。

「俺の暴走がまたいつ起こるか分からない。それを止められるのは他でもないまこだけだと俺は思っている。だから迷惑かもしれないが俺と共に歩いてくれ」

「…私は省吾の力になりたいわ。それに言われなくても省吾を守るわよ。だって私の大切な人なもの」

そう言っつて涙を流しながらも、笑顔で言っつてくれた。

そんなまこを俺はそつと抱き寄せた。

「まこ…ありがとう」

「私こそ…これからもよろしくね」

「…ああ」

波風なびく夏の終わりが近づくこの日、俺とまこは結ばれ、よつぜなくこの島に帰ってきたと実感することができた。

隠された闇（後書き）

早い展開ですがとりあえず省吾と真智子をくっつけました。

理由はこのあとが展開しやすいからです。

グタグタのままだとあと先大変なので…

では次回は神那島の休日です。

神那島の休日（前書き）

更新かなり遅くなってしまいました。がようやく更新です。

前に台本形式はやめた方がいいとアドバイスを受けましたので一応すべて編集しました。

こういったアドバイスはとても参考になりますし、なによりとてもなく有り難いので気付いたことがあります。たらどしどし書いていってけるとありがたいです。

では本編へどうぞ！

神那島の休日

「会わせたい人がいる？」

「ここは誠悟の家の居間、朝ご飯も食べ終わり、雑談をしていた。」

「ああ、まあ俺が会わせたいというより会いたいって言った」

「いったい誰なんだ？」

「第一この島にそんな人がいるとは…」

「生徒会長の内海静奈さんのお爺さんなんだけど…この島では様付けされるほど偉い人なんだ」

「様付けって…」

「心配するな、呼ばされているんじゃないって呼ばれているんだから流石に様付けされてるくらいの人と会うのは緊張する。しかも呼ばせているでなく、呼ばれているんだからな。」

「もう少ししたら清美さんが迎えにくると」

ピンポン、

「ん？来たみたいだな、じゃあ省吾、あとは清美さんに聞いてくれ」

「えっ？誠悟は来ないのか？」

「俺は用事があるから、それに今日は省吾に会つたためだからな、俺が行く必要はないよ」

確かにそうだが…さすがに不安な訳ですよ。

「まあそうだな、じゃあ行ってくるよ」

でも俺は居候させて貰ってるわけで…誠悟と美琴ちゃんには頭があらがない。なので1人で行くことにした。

ガラガラ

「おはようございます、清美さん」

「挨拶はあとだ、とりあえず車があるから、すぐに乗ってくれ」

「はい、分かりました」

俺は清美さんに急かされながら靴を履いて、表に止まっている車に乗り込んだ。

.....

「ふう、これで省吾の方はよしだ、あとは…」

そんなことを思うと階段を下りてくる音がした。

「お兄、じゃあ私は瑞希と藍の家で遊んでくるから」

俺は目で何かを言っているような気がした。

(じっくりしたものじゃなかったら殺してやる)

「ひっ!」

妹よ…:…どうしてそんなに怖い目をするんだ…:

「すみません誠吾さん、それじゃあ行つてきます」

「ああ、ゆっくりしてきなよ」

「んじゃあ」

「み、美琴ちゃん!そんなに引つ張らないで〜!」

そう言つて美琴は瑞希を引つ張つていくように連れて行つた。

「ははは、とりあえず準備完了かな」

俺は携帯を取り出して一斉送信する。

「よし!じゃあ俺も下準備をするかな」

俺はキッチンの方に向かった。

.....

「いいな省吾、絶対失礼のないようにな」

「それはもちろん分かっていますよ。だって相手は様付けされるほど」

の人なんですから」

「ならいいが…頼むぞ、これ以上私の胃を傷めつけないでくれよ…」
そう言つて悲痛の叫びを口にする清美さん。一体今までどれほど胃に来るようなことがあつたのだらう…少し気にはなつたが聞いてまた胃が痛くなつたら元も子もないので聞かないことにした。

そしてしばらくして、

「清美様、屋敷にご到着しました」

「ああ、ありがとう。さあ降りろ、すぐにお館様の所に行くぞ」

「分かりましたからあんまり急かさないでください。俺だって緊張してるんですから」

「お前の顔から微塵も緊張感が感じられないのは私だけか？お前の顔からはいかにも鈍感で無神経な顔にしか見えんのだが」

「…清美さん、それさりげなく傷つくんでやめてください」

そう言つて俺は後部座席から降りる。そしてすぐ家の方を見るとかなりでかめのお屋敷が立っていた。

「で、でかい…」

「どうした？さっさと来い。お館様がお待ちだ」

再び急かされて清美さんの案内の元、内海家に入っていく。そして

家の中の一室の前で止まる。

「お館様、清美です」

「清美か、ふむ、入れ」

「はい、失礼します」

そう言つて障子を開けて中に入っていく清美さん。俺もそれについて入っていった。

「失礼します」

「ふむ、ぬしか。小僧の親友というのは」

小僧というのは多分誠吾のことだろうな。

「はい、先日この神那島に引っ越してきました。山宮省吾です。よろしく願います」

「まあ堅いことはいい。とにかく座れ」

「は、はい」

そう言われたので座った。すると障子があいた。

「お爺様、お茶の準備に…あら、省吾君じゃないですか」

「あ、静奈さんこんにちわ。お邪魔しています」

「お爺様が会いたかった人はやっぱり省吾君だったのですか」

「小僧の東京の親友じゃからな、どんなものか見定めたかったのじや」

「見定める？」

「気にするな、それよりお主、これを見た率直な感想を言ってくれ
そういつて内海さんから渡されたのは一枚の資料。」

「これは…この島の観光ポスターですか？」

「ああ、これを見てどう思う」

見た感じはどこにでもありそうな普通のポスター。けどあまりにもありきたり過ぎてインパクトがない。

「確かに普通のポスターとしてならいいですが…どうにもありきたり過ぎて…これだと神那島の観光ポスターというよりどっかの島の観光ポスターになっちゃいますね。あと言うなら写真に写ってるものが取ってつけたような感じでやっぱりインパクトがないような…」

「ふむ、もう充分じゃ。なるほど、さすがは小僧の親友か」

そういつて満足そうに内海さんが言った。

「どづいつことですか？」

「お館様は省吾にどれほどものを見る目があるかを見たかっただけ」

だよ。誠吾にも同じようなことを…というかあいつは廃校問題で
お館様は見定めたらしいがな」

「お主は確か学院の編入試験を受けたそうじゃな？」

「はい、一応合格しました」

「お前、あの点数で一応合格という言葉で済ます気か？満点だっ
じゃないか」

「まあそうなんです…」

「そうか、だったら清美」

「はい、親方様」

そう言っつて清美さんが立ち上がる。

「清美さん？」

「小僧、今から清美と一戦交えてくれぬか？」

「はい？清美さんですか？」

出来るわけがない、相手は女性だぞ。まあ確かに総長的な所は…

「誰が総長だ！」

「えー！心読まれた！」

「思いつ切り口に出とったわ！」

パシーン！

「い、痛いっすよ！清美さん！」

「いいからさっさと庭に出ろ！私は早く終わらせたいんだ！」

「は、はい」

俺は清美さんに促され、障子を開けた先の庭に出た。そしてそこには何故か俺の靴があった。

「何故俺の靴がここに！？」

「細かいことは気にせんでよい、それより早くせんか」

「わ、わかりました」

俺は靴を履いて清美の前に行く。

「簡単にルールだけ説明するぞ、武器の使用はなし、相手の背中を地に付けたら勝ちだ」

「どんな手を使ってでもですか？」

「ああ、武器さえ使わなければな。殴り倒してもいいぞ」

「流石にそんなことはしませんが…分かりました」

「あと私を女だからって甘くみない方がいいぞ」

「でしたらこちらも誠悟みたいと思ってくると足下すくわれますよ」

「ふん、いい度胸じゃないか！」

そう言つて清美さんが間合いを一気に詰めてきた。

「はあ！」

「くっ！」

そして清美さんから右ストレートがくる。俺避けきれず腹に当たつてしまう。

「らあ！」

「ぐっ！」

その後も俺は何発か清美さんにパンチをもらった。

「おいおい、この程度じゃ拍子抜けだぞ」

「はは、ちゃんと腹だけ当たるようにしたんですがね、意外と重いパンチですね」

「お前、意外と余裕そうじゃないか」

「相手の力量を見ないと何とも力加減ができないもので、つい何発かくらっちゃんうんですよ」

「その余裕がいつまで続くかな！」

清美さんが顔にパンチを入れてくる。俺はそれを手で受け流し、そのまま掴んだ。

「なっ?!」

そして流れてきた体をそのまま利用し、投げる。

バタン!

「えっ?」

「清美さん、勝負ありですね」

「凄いです!省吾君!」

「うむ、じゃが小僧何故初めから本気を出さなかった?」

「言いましたよね?相手の力量が見たいって」

「本当にそれだけか?」

「…強いて言うなら清美さんは攻撃的な方ですから何発かもらっておいた方が隙ができるんですよ。今までは腹を中心に狙ってきた清美さんが顔を狙ってきた。顔を狙うと上体が浮くからその分投げ技に持っていき易いんですよ」

「ふむ、素晴らしい洞察力、何より経験がありそうな物言い、まっ

たく都会の若者には面白いものが多いな」

そう笑いながら言う内海さん。

「ったく、聖良や優喜の言うとおりの規格外だな。まるで歯が立たない」

「ですよ、清美ちゃんですら一撃だったんですから」

「えっ？」

「お前も佳代子や聖良たちと戦ってるだろ？あいつらは学院でもトップクラスの腕の持ち主だ、特に佳代子は学院最強、そいつに勝つたんだろ？だったら規格外以上の規格外さ」

「佳代子に勝った？俺は佳代子とは引分けましたよ？」

「一昨日、お前が理性を失った日、佳代子はボロボロだった。だから潜在能力的には学年最強だよ」

「…なんかあんまり嬉しくくないですね」

「どうしてだ？」

「俺が力をつけたのは人を守りたいからであって別にトップになるためじゃないんですよ、だから別に学院最強なんて言われても…」

「いいじゃないか、少なくともこの島の中ならお前の右に出るものがないくなったんだ。だから悪い奴もお前を恐れて何もしてこない。それでいいじゃないか」

「そうですよ！省吾君は強い！それでいいじゃありませんか」

「まあそうですね」

俺はとりあえず納得した。確かに清美さんや静奈さんの言うとおりだ。

「よし、わしの用はこれだけじゃ。もう帰ってよいぞ」

「わ、分かりました。それでは失礼します」

「おい、小僧を送って行ってやれ」

「あ、内海さん。ご心配なく、走って帰りますので」

「そうか、分かった。ではまた用事があつたらこちらから呼ぶかも知れんが頼むぞ」

「分かりました。では清美さん、静奈さん、内海さん。失礼します」

「ああ、じゃあな」

「またいつでも来てくださいね」

俺は内海邸を後にした。

「さて、ついでだ。時間もあるし用事を済ますか」

俺の用事は家を探すこと。そのために母親である三島さんの所に行

く。もしかしたら門前払いかもしれないが…

「でも可能性があるんだ。とにかく行ってみよう」

俺は内海邸から少しした所にある三島さんの家を探した。

数十分後、

「…あれは母さんだよな」

庭らしきところで水をまいている女性。間違いなく母さんだった。けれどどこか浮かない顔をしている。俺は近づいてみる。

「母さん」

俺の声に反応して母さんが振り向く。そして血相を変えたようにこちらに向かってきた。

「省ちゃん！あのあとどうしたんだい！？元気だった？」

「うん、一応誠吾の家に泊めてもらってるから大丈夫だよ」

「伊藤博士の息子さんの家だね、そう…よかったよ」

母さんは安心した表情をしていた。

「丁度いいわ、今から案内したいところがあるからついて来てな」

「どこに行くの？」

「あなたたちの代わりの家よ、昔から空き家だった家を探してそこを買い取ったのよ」

「そ、そんなことをしてくれたんだ…」

やはり母さんは優しい人だ。でもそんなことしてもらってまで…でも家が欲しいのは事実。

「で、でもいいの？」

「…これは引き取るといった私の責任だよ。だから遠慮なんてしないでくれ」

母さんがそう言ったので俺は素直について行くことにした。

そして歩くこと数分、

「あれ？この辺って確か…」

どこかで見覚えのある景色。そう、この辺りは誠吾の家の近くだった。そして思い切り誠吾の家の前を通り過ぎてすぐに母さんは止まった。

「ここだよ、偶然伊藤さんの家の近くが空き家だね、明日からはここに住んでいいからね。あと家賃とか光熱費も私が全部負担するか」

「えっ！そ、そんなことまでしてもらわなくても…」

さすがに念願の家がもらえるだけならまだしも、それプラスで光熱費もろもろまで出してもらったら…

「言つたる省ちゃん。これは私の責任なんだ。もともと親代わりするんならそれくらいは当たり前だったんだし、気にすることはないよ」

「でも俺だってバイトをすれば！」

「社会人になつたんならともかく今は学生なんだ。一生にこの期間しかない学校生活をそんな理由で無碍にはしたくないんだよ。だから今は目一杯学校生活を満喫して、そのあとに返してくれればいいからさ」

「母さん…」

母さんの思いは伝わった。それに何よりもつらいのは母さんのはずだ。だったらその気持ちを無碍にする権利は俺にはない。

「分かった。じゃあありがたくここを使わせてもらつよ」

「そうしてくれるとありがたいよ。家具とか生活必需品は一通り完備してあるからそれを使つておくれ。あとこれも」

そう言つて渡されたのは通帳と印鑑だった。そして中身を見てみると、

「ぜ、ゼロが6つも…」

どこにこんなお金があるのか分からないけどさすがにこれだけの金

額は…

「母さん、これはさすがに…」

「いいから持っていて、もし必要になったら使えばいいから。本当にこれくらいしかできないから受け取ってほしいんだよ」

「…分かったよ」

「そう言ってくれど助かるよ」

そう言っ母さんはやっどほっどした表情を浮かべる。

「その代わりなんだけどさすがに家の修理までは手が回らなかつたから…ある程度はきれいだけでもしそうじゃなかつたらごめんね」

「その辺は気にしなくていいよ。俺でも直せるところは直していくから」

「そうかい…じゃあ私は行くね。困つたらすぐにも連絡を送るんだよ」

そう言っ一枚の紙を渡してくる。多分連絡先が書かれてるんだろつ。

「分かつたよ。本当に何から何までありがとう、母さん」

そういつて俺はその紙を受け取つた。そして母さんは会つた時より少しは明るい感じで去つていつた。

母さんが去った後、とりあえず新たな家の中に入って探索してみた。そしたらキッチンがシステムキッチンで、お風呂もきれい、二階には俺と瑞希の部屋もあり、一階には広めの居間に客間があった。

「逆にどこが汚いっていうんだよ母さん…」

直す所なんてまるで見つからず、それどころか埃ひとつなかった。

「母さんって完璧主義者なのかな…」

確かに母さんの家の庭も物凄く整備されてたし…

俺が啞然としていると、

ブーン、ブーン

「ん？メールか？」

携帯が鳴ったので見てみると誠吾からメールだった。

「内海さんたちの話は終わったか？」

「終わったよ、今は俺の母さんがくれた新しい家に来ているんだ」

俺はそう返した。するとすぐに返信が返ってきた。

「良かったじゃないか、これでとりあえず一安心だな」

「ああ、ところでもうそっちは用事がすんだのか？」

また俺はそう返した。

「今終わった。んで今家にいるから来てくれないか？」

「了解」

運良くこの家の隣が誠吾の家なのですぐに向かうことにした。

ガラガラ

「あれ？お兄ちゃん？」

「ん？瑞希か、こんなところでどうしたんだ？」

「美琴ちゃんがここで待ってるって…でもお兄ちゃんはどうしてこの家から出てきたの？」

「まああとから説明するつもりだったしな、ここは母さんがくれた俺たちの新しい家だ」

「ホント！…お母さんが…」

「母さんは俺たちのためにここまでしてくれたんだし、断るのも失礼かと思ってここを貰ったんだ」

「そうなんだ…今度お礼を言わなくちゃね」

「ああ、そうするといい。それよりとりあえず誠吾の家に行こう。といってもすぐそこなだけだな」

「ふふ、そうだね、行こっか」

俺と瑞希は誠吾の家に向かった。

そして玄関。

ガラガラ、

「誠悟ー！」

パンパンパン！

「…えっ？」

「誠悟？これはいったい…」

玄関に入っすぐクラッカーを鳴らしたのは誠吾、聖良、佳代子、彩、美琴ちゃん、藍ちゃん、優喜、まこ、春樹、久志、さらにはさつきまで家にいた静奈さんと清美さんまでいた。

「神那島へようこそ！省吾に瑞希ちゃん！」

「というわけで今日は歓迎会なのだよ、ご馳走もいっぱいあるよ！」

「…ぐすっ」

「ちょ！瑞希ちゃん！？」

「す、すみません！でも…っねしくて…」

「誠悟：すまなかつたな、こんな会までわざわざ開いてくれて」

「気にするな、俺たちが勝手に計画したものなんだから、なあみんな？」

「そつだぞ省吾、第一パーティーなんだからもつと盛り上がるうぜ！」

「そつだね、せっかく開いたんだからいつまでも辛気臭い顔してないでせ」

春樹と久志もそう言ってくれた。

「まあとにかく上がってよ、中にいろいろ準備してあるからさ」

「ああ、瑞希行くぞ」

「…うん！」

俺たちはみんなの歓迎をうれしく思いながらみんなについて居間に向かった。

「では省吾と瑞希ちゃん、神那島へようこそ！乾杯！」

「……カンパイ！！」「……」

こうして歓迎会は夜まで続いた。

……

「…どうしてこうなった？」

「じゃにいつてんおよ、ちゅうか省吾ももつとのまんかーい！」
そういつて聖良が絡んでくる。

「って酒くさっ！おい誠吾！助ける！」

「わ、分かった！聖良！こっちおいで」

「せ〜い〜い〜」

そう言つと聖良は誠吾の所に行く。

「って、省吾は大丈夫なの？確かあなたも飲んでたわよね？」

そういつてまこが近づいてくる。

「ん？俺は酒には一応強いからな、昔よく飲んでたし」

「未成年なのにどうして飲んでるのよ？まったく…」

「そういつまこはどうして大丈夫なんだ？」

「私は飲んでないもの、あんなの飲めないし」

そう、みんなが飲んでいるものはお酒。これを用意したのは春樹と久志で、ジューズの中に仕込んでやがった。それに気付いたのがまこと優喜と誠悟。俺も気づいていたが別にいいだろうと飲んでいた。

「っちよ！彩！今ひつつくなつて！」

「いいやらいか〜！」

「にゃあーにゃあー！」

「うっ、おにいちゃん！」

「えへへ、えへへ」

「ちよー！みんな落ち着いて！」

しかしなんてカオスな状態だ。彩は完全に聖良と同じく絡み出し、美琴ちゃんは泣いてるし藍ちゃんは壊れてるし、佳代子にいたっては猫化してるし、それを必死に優喜も止めようとしてるが…

「橋本さん！どうして僕を振ったんだんだー！」

「そつだぞそつだぞ！どうして何だ！」

「それを今聞くの！？ていうか助けて〜！」

優喜も春樹と久志に何故か絡まれてるし…

「しずな〜なんかあつくないか〜」

「そつれすね〜ぬいじゃいましょうか」

なんか静奈さんと清美さんは脱ごうと…って！

「まこー！静奈さんと清美さんを止めて来いー！」

「えっ？なっ！ちょっと会長に副会長！何してるんですか！」

そう言つてまこは二人を止めに行った。

「ははは、なんかめっちゃにぎやかだな」

まあたまにはこういうのもありか、

「お兄ちゃん……」

瑞希が少し頭を押さえながらこつちに来る。

「少し飲みすぎたか？」

「うん……私はもともとお酒強くないし」

「んじゃあ寝とくか？」

「そつする……」

そついつて俺の膝に頭を乗せて横になる。

「お兄ちゃん……私ここに來れてよかった……」

「そうだな、みんな暖かい人ばかりだからな。この島なら気兼ねなく生活できそうだな」

「うん……すう……」

「…本当に良かった」

本当の母さんが亡くなってから瑞希はかなり衰弱してたからな、少し和らいでくれたのはいいことだ。

「瑞希ちゃん、もう寝ちゃったの？」

「ん？ああ、それよりも良かったのか？」

「ええ、とりあえず部屋を移動させて寝てもらったから」

「そうか」

そう言いながら俺の隣に座ってきた。

「にしても何とも言えない歓迎会になったな」

「まったくよ、もっと健全な歓迎会になればよかったのに…」

「まったくだな、でもこのくらいの方がどこか落ち着くよ」

「落ち着く？」

「ああ、みんなが本当に俺たちを歓迎してくれるって分かるし、変に取り繕った笑顔なんてもう東京で見飽きたしな」

「東京の人はみんなそんなものなの？」

「みんなではないけど、少なくともこういう風に歓迎会なんてないからな。俺は実際そうだったし」

「そっか、省吾って結構あっちこっち行ったりしてたもんね」

「ああ、あの時は本当の友達なんてできなかつたし、嫌だつたよ。でも、今は嬉しくも思つかない」

「えっ？どうして？」

「こうしてまこと会うことができた、なんて思えるからかな」

「ちょー！は、恥ずかしいじゃない…そんなにストレートに言われると…」

そう言っつてまこは顔を赤らめる。

「おいおい、言ってる俺も恥ずかしいんだからそんなに恥ずかしがるなよ」

「でも…」

まこはそっぽを向いてしまった。

「み、三木さん！助けて！！」

「どうなんだ！橋本さん！」

優喜が未だに久志に迫られてる。というか久志ってもう酔い冷めてるんじゃないかね？ってくらい目がマジになっていた。

一方の春樹はすでに爆睡中。そして彩と佳代子も床にひれ伏すよう

に寝ていた。美琴ちゃんと藍ちゃんはすでに部屋に戻ったのか、もうこの場にはいなかった。

「ってこらあ！阿部！いい加減に寝てなさい！」

そう言ってまこは全力で久志の頭をひっぱたたいた。

「痛い！もう一回！」

どこの青汁のCMだ、久志よ。

「じゃあ遠慮なく！たあ！」

優喜は警棒で殴ろうつと…って！

「優喜！それはやめ…」

バチン！

「おお…ショータイムだ…」

今度はどこのスークだ、って突っ込んでる場合じゃない！

「優喜！さすがにやりすぎだろ」

「えっ？阿部君なら大丈夫だよ」

「そんなわけあるか！て言っかどっからその警棒を…」

突っ込んでいると久志がフラツと立ち上がった。

「ふう、どうやら取り乱していたようだね、すまない橋本さん。というわけで誠悟、布団借りるぞ」

「ああ、俺の部屋にあるから使ってくれ」

そいて何事もなかったように久志は二階へ上がっていった。

「…とりあえずどこから突っ込んでいいのやら…」

「ね？阿部君ならあれくらいじゃないと正気にならないから」

「平然と言っているがあれって絶対普通じゃないよな？」

「阿部なら納得せざるを得ないのよ。だって加納さんに蹴り飛ばされたり篠原さんに殴り倒されても平然と起き上ってくるのだから」

久志は俺の中である意味最強の戦士として格付けさせてもらうことにした。

「久志…ある意味尊敬するぜ」

このあと聖良もとうとうダウンしたので寝ることにした。

こうして俺と瑞希の神那島歓迎会は幕を閉じた。

神那島の休日（後書き）

今回は歓迎会ということにしました。

ちょっと本編と被った感がありますが気にしないでください。

というわけで次回からはいよいよ学園祭編です。

次の章では準備期間について書こうかと…

では次回。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7058w/>

あの空を夢色に

2011年11月28日04時53分発行